
魔法少女リリカルなのはM E G A M A X S A G A

ゼロディアス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはMEGAMAX SAGA

【NNコード】

N9302Y

【作者名】

ゼロデイアス

【あらすじ】

ベリアル銀河帝国を壊滅させて早数ヶ月、ゼロが結成したグレンファイヤー、ミラーナイト、ジャンボット、そしてウルトラマンゼロのウルティメイトフォース・ゼロはダークロープスゼロと遭遇し、ロップスゼロの力により異次元へと飛ばされる。

そこは魔法、スーパー戦隊、仮面ライダー、星の戦士達、魔弾戦士、その世界のウルトラマンが存在する世界……。

魔法少女リリカルなのはMEGAMAX SA、始まります。

これはゼロシリーズのリメイク版です。

第1話『ウルティメイトフォース・ゼロ』（前書き）

ゼロシリーズのリメイクです。
ゼロまどは大丈夫な筈……。

第1話『ウルティメイトフォース・ゼロ』

ベリアル銀河帝国を壊滅させ早数ヶ月。

光の国の中、ウルトラ戦士、ウルトラセブンの息子「ウルトラマンゼロ」は別の宇宙で出来た仲間、赤い炎の身体を持つ炎の戦士「グレンファイマー」、鏡を操る緑の線が身体にある銀色の鏡の騎士「ミラーナイト」、赤と白の巨大な口ボ鋼鉄の武人「ジャンボット」達と共に結成した新しい宇宙警備隊「ウルティメイトフォース・ゼロ」の4人はある小惑星に降り立ち、4人は話しあっていた。

『これにてパトロールは終了だな』

「ああ、ジャンボット。一旦光の国へ帰らねえとな」

グレンファイマーは大きく欠伸し、早く帰るよつに言つ。

「早く帰ろうぜ、こんな所いたら風邪退いちまう」

だがその時、こちらに幾つかの飛行物体が接近しているのが見えた。

「待てグレン！ こっちになにか近づいている！」

「あん？」

ミラーナイトの言葉で、グレンファイマーは上を見上げると一つ目の黒とオレンジの身体を持つ機械巨人……「ダークロープスゼロ」が腕を二字に組みあわせて必殺光線である「ダークロープスゼロショット」をゼロ達に放った。

「ぐわあああ……？」

「……」

「くつそ、ダークロップスゼロだとー!?」

ダークロップスゼロは胸部を変形させ、「デイメンジヨンコア」と呼ばれるものをして、そこから相手を次元の彼方にまで吹き飛ばす超時空波動光線「デイメンジヨンストーム」が放たれ様としていた。

「させるかよー!!」

「先制攻撃たあやつてくれんじえねえか!! ファイヤースティック!!」

ゼロと炎のステイック型の武器「ファイヤースティック」を持つてロップスゼロに攻撃仕掛けるが、ロップスゼロは素早い動きでゼロとグレンファイヤーの攻撃を後退して避け、デイメンジヨンコアにエネルギーが充填される。

そして「デイメンジヨンコアから嵐を巻き起こす様な「デイメンジヨンストーム」がまずはゼロとグレンファイヤーに放たれる。

「「ぐわあああーーーーー?」「

「ゼロー!!」

『グレン!!』

ジャンボットとミリィーナイトがどうにか2人を助け出そうとするが、彼等もまたデイメンジヨンストームに巻き込まれてしまい、ウルティメイトフォース・ゼロはデイメンジヨンストームによつて割れた空、次元の彼方へ飛ばされてしまった。

*

此處はゼロ達がいた世界にあつた地球とは別の世界の地球……。

その地球の「海鳴市」のある公園で、2人の少年が倒れていた。

「つて……んつ？」

その少年は顔が若干「DOG DAYS」の「シンク・イズミ」に似ていたが、彼よりも凜々しい顔をしていた。

少年は隣で眠っている少年の姿を見る。

その少年は「フュイト・ゼロ」の「ランサー」に似ており、一向に目を覚ます気配がない。

シンク似の青年は自分の身体を見るも否も、目を見開きつつ顔をペタ触る。

「俺……地球人の姿になつてんのか……？」

実はこの少年、お気づきになつてる方もいるやもしれないが、ウルトラマンゼロが地球人の姿になつたものだった。

「じゃあこいつは？」

隣の少年は誰なのか搔さぶつて起^レして見る事に。

「うう……んつ？ だ、誰だ貴様！？ イ、イイイはどうだ…？ みんなは……！？」

目の前的人物がゼロである事に気付かず、ミラーナイトはゼロを睨みつけ身構えた。

「その声からしてお前、ミラーナイトだな」
「なぜ私の正体を……？ まさか、ゼロ？」

隣で眠っていた青年はミラーナイトが人の姿になつたものである。

「グレンとジヤンボットは？」

「分からねえ、あいつ等とはばぐれちまつたみてーだな」

兎に角、此処にいても始まらないのでミラーナイトとゼロは歩き始めること。

「だが、ゼロはまだ地球の年齢ではそこまで小さかったのだな」「それをいつのならお前もだろ」

ミラーナイトとゼロの見た目は小学生ほどである。

「じつかし、いは見た所、親父達の言つてた地球だな」

ゼロやミラーナイトについて、今まで映るものは全て珍しいものばかりだった。

「そう言えば、地球人と出会つた時、名乗る時はなんと名乗る？」

流石に我々の名前をそのまま使つ訳には……

「そうだな……」

そこで2人は考えた結果、ゼロは以前同化していた人間の名前と、セブンが地球人の姿になつた時に使つていた名前の苗字をとつて「モロボシ・ラン」と名乗る事にし、ミラーナイトは「騎士鏡太きし きょうた」「騎士鏡太きし きょうた」と名乗ることにした。

*

その頃、グレンファイヤーとジャンボットは……。

グレンに至つてはランや鏡太と同じ様に人の姿になつており、フュイトシリーズのギルガメッシュに似ているが髪の色は赤の少年になつていた。

彼は森の中で倒れており、そこに1人の青年が駆けつける。

「グレン！　おいグレン！」

ジャンボットと同じ声を発する青年。

「うーん……。宇宙帝国ザンギャックとの戦いで失われたスーパーウォーズの力を受け継いだのは……とんでも無い奴等だった！！」「どんな寝言だそれは！？」

グレンファイマーの有り得ない寝言でシッ ハリツハ、青年はグレンファイマーを叩き起こした。

「いつてえ！？ なにすんだよ！？ あつ？ お前、誰だ？」
「ジャンボットだが？」

その青年は自分が「ジャンボット」であると言つてきた。

「なにいいいい！！！？ 焼き鳥！？」
「焼き鳥では無い、ジャンボットだと言つてこるだろ！… ほり、水を持ってきたぞ」

実はジャンボット、身体を縮小させる機能がジャンボットの状態で使えることが出来るらしく、もしもの場合は人の姿に変わる機能まであつたらしいのだ。

そして、ジャンボットの容姿はガンダム〇〇のティエリア・アーティ似であり、グレンファイマーを起こして歩き始める。

「ゼロ達は？」
「分からぬ、ばぐれてしまつたようだ」

ジャンボットはグレンファイマーに此処はゼロの言つていた地球だということを説明し、ゼロの師匠「ウルトラマンレオ」の話を聞いたことがある為、一応地球人らしい名前を2人は考える。

「『岬炎斬』。 どうだ？ カッケエだろ？」
「ナオの名前を借りて『鋼ナオキ』という名前で行くか」「おい、無視すんな焼き鳥！ 焼くぞ！」

こうしてグレンファイヤーは「岬 炎斬」、ジャンボットは「鋼ナオキ」という名前が決定した。

彼等もまた歩き出し、森を抜けて街を歩き、人気のない場所を歩く。

「にしても腹が減った……。肉が食いてえ！」

炎斬の腹が音を鳴らし、腹を手で押された。

「しかし、この星の金などは無いしな……。どうしたものか。私は一応別に何も無くても大丈夫なのだが」

そして耐えきれなくなつたのか、また炎斬は道端で倒れてしまつ。

「グレン！！」

*

一方、炎斬とナオキを探しているランと鏡太はまた先程と同じ、かなり広い公園に戻つて来ていた。

「グレンもジャンボットも見つかってねえな」

「……」

静かに林ばかりがある場所を見る鏡太。

「どうした？ ミラー…… 鏡太？」

「ああ、林の中でなにか聞こえたような……」

その時、林の中からなにかが爆発するような音が聞こえ、ランと鏡太は急いでその場所に向かう。

そこでは、変わった服装をした少年が黒い怪物と戦つており、怪物は少年に襲い掛かるが少年は右手からバリアラしきものを展開。

だが、ランと鏡太が乱入して怪物を思いつきり蹴り飛ばした。

「「うおおお！」」

【グオオオ！-！？】

「ええつ！-？」

ランと鏡太の乱入に、驚きつつも、鏡太が少年に駆け寄る。

「君、大丈夫か！？」
「あつ、はい……」
「ここは僕達に任せて君は逃げるんだ」

しかし、少年は「いや、でも……」となにか言いたげだが、ランは左腕の銀色のブレスレット、「ウルティメイトブレスレット」からメガネ型のアイテム「ウルトラゼロアイ」を取り出す。

「ゼロ！ この少年の前で変身するのは……」
「仕方ねえだろ！ 生身でどうこう出来る相手じゃねえ！」

ウルトラゼロアイを目に装着し、ランは光に包まれてゼロの姿となり、頭に銀色の2本のブーメラン「ゼロスラッシュガード」が装着され、赤と青の身体を持つ等身大の「ウルトラマンゼロ」に変身し、すぐさま怪物を殴り飛ばした。

「シユア！！」

〔グゴオオ！！？〕

両手を「キ」キとな鳴らし、ファイティングポーズを構えるゼロ。

「テーマの相手は……俺がしてやるぜーーー！」

第1話 『ウルティメイトフォース・ゼロ』（後書き）

炎斬の寝言はもちろん声ネタですw

第2話『Wの変身／2人で1人の仮面ライダー誕生』

光の国の戦士、ウルトラセブンが息子、「ウルトラマンゼロ」は一気に黒い怪物に突っ込んで行くと強烈なパンチをお見舞いする。

「デリヤアア！－！」

【グゴオ！－？】

さらにゼロは怪物に廻し蹴りを食らわし、頭部に強烈チョップと次々強力な技を打ちこんで行く。

「シユア！－！」

【ギシャアアア！－！？】

怪物が身体から黒い弾丸をゼロに放つてくるが、ゼロはそれらをなんとか避け、頭の上にあるブーメラン、ゼロスラッガーを怪物に投げつける。

「シェア！－！」

ゼロスラッガーは怪物を切裂き、真つ二つになつたが、真つ二つの身体はまた元の一つの身体に戻り再生してしまつた。

「なに！－？」

「再生した！－？」

戦いの様子を伺っていた鏡太も驚き、鏡太の隣にいる少年は「ダメだ、それじゃ……」と呟く。

「「れなりじうだーー！」

腕を「レ」字に組みあわせ、必殺光線である「ワードゼロショット」を怪物に発射し、怪物はあちこちに破片となつて飛び散り、その破片は地面に当たると地面が凹んだり、木に当たると木が倒れたりして消滅したかに思われたが、再び再生し、身体から帶らしきものを出してゼロの両手、両足を拘束する。

「なに！？ 離せーー！」

怪物を動きを封じたゼロに飛びかかる。

「ランーー！」

鏡太が助けに行こうとするが、それよりも先に少年が飛び出し、ゼロの前に立つ。

「バカ！ 来るんじゃねえーー！」

「くつー！」

少年は右手を怪物の前にかざし、バリアらしきものを展開して怪物の攻撃を防ぎ、なにか呪文のようなものを呟いて行く。

「ジユエルシード、封印ーー！」

バリアに弾かれた様に怪物はゼロを解放して吹き飛び、何処かに逃げようとするが少年がチーンのようなものをバリアから出して怪物を拘束。

「今ですーー！」

「やるじゃねえか

ゼロはゼロスラッガーをカラータイマーの両側に装着し、そこから放つ光の光線「ゼロツインショート」を怪物に直撃させる。

「逃がすかよつ……」

【ギシャアアアア！……？】

怪物はゼロツインショートの衝撃でチーンが破壊され、怪物はかなりの距離を吹き飛んでしまい、結局逃がしてしまった。

(今の状態だと、弱らせるのが最優先だな……)

少年はそう思いながら急いでその怪物を追いかける。

「逃がしてしまったか」

ランの姿に戻ったゼロに、鏡太が駆け寄る。

「ああ。 それにしても、アレとお前の正体はなに……ってあり?」

ランと鏡太はあの少年を探すが見当たらず、この公園の中を探しましたが、結局見つからなかつた。

*

その頃、「高町家」という表札がある家。

「んっ？」

高町家の家のある部屋で、メガネをかけた頭にクリップをつけた少年「高町ライト」がなにかを感じた。

「この世界に、なにか来たようだね……」

それと同時に、彼の義理の姉である「高町なのは」はある夢を見ていた。

『誰か……僕の声を聞いて!』

それは先程の戦闘がなのはの頭の中に流れており、赤い宝石を首にぶら下げたフェレットが誰かになにかを訴えかけようとしていた。

「朝だよ姉さん、起きないと」

「ふえ！？」

気付けばもう朝、なのははライトに起こされ、半分寝ぼけながら姉の「高町美由紀」、兄の「高町恭介」、父の「高町士郎」、母の「高町桃子」と朝食を済ませ、友人の金髪の少女「アリサ・バーニングス」と紫の長い髪の少女「月村すずか」と共に聖祥大付属学校にバスに乗つて向かつた。

そのバスにはライトも乗つているが、彼は隅っこで外を眺めてるだ

けであり、なのはやアリサ、すずかの会話に入りうらしなかった。

「アンタも少しさなにか話したらどうなのよ？」

アリサがライトに言つた。

「僕はそういうのが苦手なんだ。『ごめんね』

ライトは申し訳なさそうにするが、アリサはため息をついてなのはとすすかと再びお喋りをしだす。

(ライトくん、どうしてあんなに他人を避けるのかな?)

すずかはライトに対してそう思い、一方でのランと鏡太は……。

*

「は、腹が……減つて……」

「水……水で腹を満たせば……、でもやつぱり満ちた気がしない」

あの公園で一夜を過ごしており、ランはベンチでぐったり倒れ、鏡太はフラフラしながらも水を飲みに行こうとする。

因みに元の世界に帰つてセブン達にジャンボットとグレンファイヤーの搜索を手伝つて貰おうとウルティメイトブレスレットの力を使おうとしたが、力が足りないのか、次元を超えられなかつた。

さらに言えば、ここが自分達のいた世界の地球ではないか調べた所、かつて地球を訪れたウルトラマンを知る者は誰一人としていなかつた。

なお、ランが戦闘を行つた場所はボロボロであり、警察などが来ており、立ち入り禁止になつてゐるが此処までは立ち入り禁止にはなつていない。

鏡太もあまりにも空腹な為、鏡太は倒れこむ。

そこへ偶然通りかかつた茶髪のチャージを着た男性が2人に声をかける。

「大丈夫か！？」

その男性は「トウモロー・リサーチ」と呼ばれる何でも屋を経営しており、2人を担いでそこまで運んだ。

「ウメーデコレ！－」

「申し訳ありません、お世話になつてしまい……」

ランはコンビニで男性……「浅見竜也」^{あさみたつや}が買つてきた弁当を美味しそうにガツガツ食べており、鏡太も竜也が買つてきて食べながら竜也に申し訳無さそうにしていた。

『お食事タイム！－』

「「うおッ！？ なんだコイツー！？」

両腕を同時振り上げたりする小型のロボ、「タイムロボター」に驚くラン。

それに引き換え、鏡太は特に驚いていなかつた。

ランもよくよく考えればロボターよりも凄いロボットや、他のウルトラマン達から聞いた兵器を知つていていた。

ジャンボットとかメテオールとかガ○ダムとか。

「待て待て！ 今なんか明らかにおかしいのがあつたぞ！」
「誰にツツコミを入れてるんだラン？」

竜也はロボターを持ち上げてテーブルに置く。

「ああ、こいつはな、故郷に帰った俺の仲間が作ったロボットなんだよ」

どこか懐かしそうに、楽しそうに話す竜也。

「すこませへん、ジエット便です」

とやっこくこくへ宅配にきた男性が入ってきた。

「あっ、天馬！」

男性の名前は「工藤天馬」といつ名前であり、決められた時間内に宅配ものを配る宅配便である。

くどうひでんま

「荷物持つてきました竜也さん」

小さな段ボールの荷物を笑いながら竜也に渡した後、天馬はランと鏡太を見る。

「えーっと、隠し子？」

「なにをどうしたらそんなんだよ！？」

苦笑いしながら言う竜也、その後、天馬はバイクに乗って仕事に戻り、竜也に「家とかはどこ？」と質問され、困り顔のランと鏡太だが、仕方なく鏡太は自分達には帰る場所が無いと説明。

竜也は敢えてその理由を聞かなかつた。

「帰る場所が無いならここにいていいよ。でもさ、話す気になつたらちゃんと俺に言ってくれよ？」

ランと鏡太の肩を優しく叩き、笑顔を向ける竜也。

「どうして……」

「まあ、見た感じ、君等家出かなんかだろ？ 俺も家出中だし、だから俺が注意したら『お前が言つたな！』って感じになつちゃうからさ」

苦笑いする竜也。

そしてランと鏡太はトウモロー・リサーチに住む事になった。

*

その深夜の出来じと、ランと鏡太はなにかを感じたのか、目を覚ました。

「ラン……」

「お前も感じたか」

外に出てランと鏡太はそのなにかを感じた場所へと走つて行つた。

空を見上げれば空の色は茶色い。

明らかに異変が起きている証拠だらう。

とある「獅子動物病院」というその名の通りの動物病院で、学校帰りに夢でみたあの傷付いたフェレットを発見し、それをここに獣医である「獅子走」^{しきかける}に診て貰つた所、命に別状は無かく、一度ここでフェレットを預かつて貰うこととした。

しかし、なのはと念の為といふことで何かが入つたアタッショケースを持つたライトは此処から誰かが呼んでいる気がした為、ここへまで来た結果、あのフェレットがランが一度は撃退した怪物に襲われており、なのはに向かつて飛びこんだ。

「な、なにアレ！？」

「来て……くれたの？」

「えつ？」

フューレットがいきなり喋ったことに動搖するのは、対するライターはフューレットにかなりの興味を持った。

「興味深い！　喋るフューレットー　ゾクゾクするね～」

「そんなこと言つてゐる場合じやないでしょライター……」

なのははフューレットを抱えてライトと共に逃げだす。

フューレットの話によれば、ある物を集めるために此処とは違つ世界からやってきたそうだ。

そしてなんでもなのはには「魔法」の資質が高いらしい。

「魔法……？」

「魔法！？　それは一体どんなのだい！？　是非とも教えてくれ

！」

（ライトの検索バカが～）

少々ライトの今の状況とは裏腹に楽しそうに喋る為、なのははライトに少し呆れていた。

「取り合へず」のナのことは気にしなくていいから

「えつ？　あつ、うん。兎に角、君には資質がある。だから僕に力を貸して！　お礼は必ずしますから！」

「お礼とかそんな場合じや……つ！？」

そこへあの怪物がなのは達に襲い掛かつて来たが、突如現れたランと鏡太の飛び蹴りを喰らい、怪物は蹴り飛ばされた。

(アレ? テジャヴ?)

とフュレットは思った。

「またテメーか」

「ラン、分かつてると思つが……」

ウルティメイトブレスレットからウルトラゼロアイを取り出すラン。

「いや、そう易々と人がいる前で正体を明かしていいのかラン!?」

鏡太のツッコミを無視し、ランは変身しようとするが、怪物の放った帯の攻撃を手に喰らい、ウルトラゼロアイが飛ばされてしまつ。

「つじえ!? ヤロー!..」

「予習しますね……」

ランはウルトラゼロアイを取りに行こうとするが怪物は帯を伸ばし、ランと鏡太を叩きつける。

「うわあ!..!..」

「止むを得ないかな……」

ため息をついたライトはランの元に駆け寄る。

「ライト! まさか……!」

なのははライトがなにをしようかするか分かった。

ライトは倒れこんでいるランの元に駆け寄り、アタッシュケースを見せる。

その中には6本のUHSメモリのような「ガイアメモリ」があり、そして赤いバックル、「ダブルドライバー」が入っていた。

「それは……」

「悪魔と相乗りする勇気、あるか?」

ライトの言葉に戸惑いつつも、ランはダブルドライバーと黒いガイアメモリ「ジヨーカーメモリ」を掴む。

ライトはダブルドライバーの使い方を手短に説明し、その間に鏡太が怪物を引きつけ、フェレットもなのはにあの赤い宝石を渡して手短に説明をすると、ランはダブルドライバーを装着すると同じものがライトの腰にも現れる。

緑のガイアメモリ、「サイクロンメモリ」をライトは持ち、ジヨーカーメモリとサイクロンメモリのスイッチを押すとガイアウェスペーイが鳴り響く。

【グル……?】

『サイクロン!』

『ジヨーカー!』

そしてガイアメモリを2人はダブルドライバーに差し込む。

「「変身！！」」

『サイクロン・ジョーカー！』

ライトのダブルドライバーに差し込まれたサイクロンメモリはランのダブルドライバーに転送され、ライトは目を閉じて倒れるとランの身体が変わって行き、右は緑、左は黒、額には「W」と書かれたマーク、両目は赤の「仮面ライダーダブル・サイクロンジョーカー」に変身した。

「なんだよコレ……、マジで変身した」

『これがダブル……、仮面ライダーダブルだ』

右目が点滅し、ライトの声が聞こえる。

一方、なのはもフュレットから魔法の説明を聞き終えた。

「僕と同じことを続けて！」

「う、うん」

フュレットが呪文を唱え、なのはもそれに続く。

「レイジングハート、セットアップ！」

最後にそう叫ぶと桃色の光に包まれてなのはは聖祥の制服に酷似したバリアジャケットと呼ばれる服を着た。

宝石は「レイジングハート」という杖に変化し、なのはは突然の事に戸惑いまくる。

「ふええええ！？ どうなってるの！？」

「落ちついて僕の言つことによへ聞いてー！」

だが、怪物が黒い帯を伸ばしてなのはに攻撃してきたが、なのはは咄嗟にレイジングハートを構えるとレイジングハートはバリアを開けて攻撃を防ぎ、そこへダブルが両足に風を纏わせた蹴りで帯が千切れる。

【グオオオー！？】

「スゲーな、これ！ んつ？」

ダブルは足元に落ちていたウルトラゼロアイを回収し、そのまま怪物に突撃する。

『僕達が奴の動きを封じる、その隙にそこのフーレットからの対処法を聞いてくれ姉さん』

「う、うん」

ダブルは怪物へと突っ込んで行き、帯でダブルを叩きつけようとしたがダブルは高く飛び上がり、ストレートパンチを怪物に叩きこむ。

【グボー！？】

『ここは一気に決めるよ、君、名前は？』

「モロボシ・ラン」

ジョーカーメモリを引き抜き、右腰のマキシマムスロットにメモリを装填する。

『ジロー！ カー！ マキシマムドライブ！』

ダブルの周りに風が纏い、空中へ浮かぶとダブルは右半分、左半分

に分かれてキック……「ジョーカー エクストリーム！」を怪物に繰り出した。

「ジョーカー エクストリーム！…」

【グルアアアア…！…？】

そこでフェレットからの合図があり、なのはのレイジングハートからピンク色のリボンが放たれ怪物を拘束。

「ジュエルシード、封印…！」

怪物にレイジングハートをかざすと怪物は消滅していき、弾け飛んであちこちに破片が飛び散る。

【ギシャアアア…！…？】

そしてレイジングハートの中に青い宝石のような「ジュエルシード」が入り込む。

その後、変身解いたランはライトも田を覚まし、空も元の色に戻り、パトカーの音が聞こえ始める。

周りを見れば辺りをボロボロ……。

「ま、まずいよ！ 急いでここから離れないと…」

「ああ、落ちついた場所で色々話し聞くぞ…」

そしてラン、フェレットを抱えたなのは、鏡太、ライトはすぐさまそこから離れてあの公園へと向かつた。

第2話『Wの変身／2人で1人の仮面ライダー誕生』（後書き）

竜也はランと鏡太の親代わりに……。

次回予告

アンク

「はつ！？ ここはどこだ！？」

フェイト

「怪獣……？」

かざ
風
かみひかり
上光

「可愛いですよ？」

カオスリドリアス

「キエエエエー！！！」

光

「僕と一緒に……戦ってくれる？ コスマオオオオス！……」

次回『鳥怪人と金髪少女と優しさの巨人』

第3話『小さな勇者』（前書き）

タイトル変わった……。

次回もコスモスだけじゃ中心なのは……？

ハードボイルドなライダーも登場。

OP「Spin it」

ED「ウルトラマン」「コスモス～君にできる何か～」

友好鳥獣リドリアス

カオスリドリアス

登場。

第3話『小さな勇者』

「また」の公園に行くことになるとはなあ

再び嫌な思い出しか無い公園へと来たランと鏡太。

そこにはなのは、ライト、フーレットがいる。

「んでも？　事情を話して貰おつか。　まあ、ありやなんだ？」

ランの質問に、フーレットは答える。

「あればジュエルシード」「ジュエルシード？」

ジュエルシードとは、フーレット……「ユーノ・スクライア」が発掘した遺跡なのだが、大変危険なものな為、船で運んでいた所、何者かの攻撃を受けてジュエルシードは全てこの世界へと来てしまったのだ。

そしてユーノは本当は一人で責任を持つて集めようとしていたが、やはり一人では無理があつたのだ。

「そういう君達は、何者なんですか！？」

ユーノの質問にランと鏡太はどう答えていいか分からず、ライトは取り合えずダブルの説明だけはしておくことに。

「あれは仮面ライダーダブル。　僕も君と同じく、別の世界からき

たんだ。 とある仮面ライダーに助けられてね

ライトはその昔、別の世界でダブルが使用しているのとは別のガイアメモリ、人間を怪物へと変わるガイアメモリをライトの力を使い、「ミコージアム」と呼ばれる組織は制作していた。

ライトの能力とは彼の頭の中には「地球の本棚」と呼ばれる地球の全てといつていいく程の知識が詰まっている。

だが、ライト自身もそれら全てを閲覧した訳ではないのだ。

そしてライトはガイアメモリを作るのを良しよせず、何度も逃げだそうとしては失敗。

しかしある時、1人の仮面ライダーが自分を助けてくれた。

ミコージアムがガイアメモリを制作しているビルに白い帽子を被つた顔が渋い男性がライトを救いだす為潜入してきたのだ。

その男性の名は……「鳴海壮吉」。

壮吉はライトを探すが途中、幹部である黒服の男達に囲まれてしまう。

「ふう……」

複数の男性達に囲まれ、全員殺氣を出しまくっているにも関わらず、壮吉は余裕の態度を見せていた。

一斉に男性達が壮吉に殴りかかってきたが壮吉はそれら全てをかわ

し、それ所が自分に襲い掛かってきた男性にはからず一撃や一撃はパンチなどを決め込んでおり、次々と倒れて行く男性達。

「うおおおおおーーー！」

男性の1人が飛び蹴りを放つてくるが、壮吉も帽子が落ちない様に抑えながら飛び上がって飛び蹴りを放つ。

結果、壮吉の蹴りのみが男性に叩きこまれ、蹴り飛ばされる。

「ぐわああーーー？」

「フツ」

蹴り飛ばされた男性は立ち上がり、1本のガイアメモリを取り出す。

『マスカレイドー』

それを首筋に当てると男性はタキシードを着た黒い怪人「マスカレイド・ドーパント」となり、さらに複数のマスカレイド・ドーパントが現れ、さらには上半身は女性、下半身は芋虫のよつな「タブー・ドーパント」が現れる。

「こんな所にノコノコやつてくるなんて…… フフ」

タブーは壮吉に対して笑うが、壮吉は態度を崩さない。

「撃つていいのは撃たれる覚悟ある奴だけだぜ、レゲトイ？」「んつ？」

「ガイアメモリを仕事に使わないのが俺のポリシーだつたんだが、止むを得まい」

壮吉はダブルドライバーのメモリを差し込む場所、メモリスロットが一つしか無い「ロストドライバー」を腰に装着し、「S」と書かれたガイアメモリを取り出す。

『スカル！』

「変身」

帽子を一度手にとつて取り、メモリをスロットに差し込んで傾ける。

『スカル！』

壮吉は姿を変え、骸骨を思わせる黒いライダーへと変身し、最後に帽子を被つて壮吉は「仮面ライダースカル」に完全に変身した。

スカルは右の人差し指をタブーに向ける。

「ああ……、お前の罪を、数えろ！」

マスカレイド達が一斉にスカルへと攻撃を仕掛けるがスカルは殴りかかってきたマスカレイド一体の拳を受け止め、空いている腕でマスカレイドを殴りつける。

「トウ……！」

「うわおおお……！」

2体のマスカレイドがスカルの背後に迫つて来たが、スカルは廻し蹴りで一気に2体を蹴り飛ばして壁に叩きつけ、もう2体のマスカレイドの首を掴みあげる。

「おのれ……！」

タブーの放った赤いエネルギー弾がスカルに迫るがスカルは今掴みあげているマスカレイドを盾に使い攻撃を防いだ。

そこで銃型の武器、「スカルマグナム」を取りだし、タブーと撃ち合ことなる。

「んつ？」

スカルは偶然ここを通りかかったライトを発見し、タブーをなんとか巻いてライトの元へ向かつた。

「自由になりたいか？」

そして牢屋のような部屋でジッとしているライトを発見したスカルがライトに問いかける。

ライトは頷き、スカルはライトにその手を差し伸べた。

「これからはお前の自由なように決める。自分の生きる道を自分で決める権利はあるからな」

そして壮吉はこの世界については何時までも「コージアムが追いつく」と思い、ある者の力を借り、この世界の高町家へと預けた。

家族の温もりを感じたのは、高町家が一番だったからだ。

*

そして現在、とある一軒家で炎斬は目を覚ました。

「メ～ガレンジヤー！？」

と何か寝ぼけていたが。

「目覚めたのか、炎斬！」

そこへナオキがやつってきた。

「あつ？ 焼き鳥……俺は……。うう、腹減った」

炎斬はお腹を鳴らし、そこに1人の少年が入ってきた。

「あつ、目が覚めただんだ」

「コードギアスの枢木スザク似の少年で、首には紐で通した青い意思をぶら下げて、名前は「風上光^{かざかみひかり}」である。

光は倒れている炎斬を見つけてナオキと共に此処まで連れてきた。

「食事、出来てますから食べていいですよ」

炎斬に光は微笑み、炎斬は「おお！ サンキュー！！」とお礼を言った後、食事があるリビングに直行した炎斬だった。

「すまない、こんな見ず知らずの私達をなにも聞かずに泊めてくれて……」

「ううん、僕、1人暮らしだつたから今まで、だから誰か来てくれた事には嬉しいんだ」

「1人つて……家族はどうして……」

両親と兄は3年前に他界、今は親戚の仕送りで生活している。

なぜ親戚と暮らさないのかと聞いた所、親戚は大家族らしく、光曰く「迷惑かけたくないから、だから仕送りだけで十分」とのこと。

「それじゃ僕は用事があるから」

それだけ言つと光は家を出て出かけた。

*

とある森の中、そこでは巨大な鳥の怪獣、「友好鳥獣リドリアス」が木に隠れて大人しくしており、それを不思議そうに見る黒い服の

金髪の少女「フロイト・テスタークサ」と狼の耳と尻尾を生やした女性「アルフ」。

「これば……？」

リドリアスを不思議そうに見るフロイト。

「フロイト、危なそうだからさあそれ以上離れようよ」「おうよ」

因みにリドリアスは眠っている。

「うーん……、そつ、かなあ？」

「いいから早く行こうって！ ジュエルシードも無いみたいだし！」

「どうやらこの2人もジュエルシードを探しているらしい。」

「でも、この子……優しい子な気がする」

するとリドリアスは目を覚ました。

「クエニ」

「ほらー… 田覓めちやつたよー。」

心配するアルフだが、リドリアスは舌を出して優しくフロイトの頬をペロッと舐めた。

「ひやつー…？」

「クエニ」

フロイトは一瞬戸惑つたが、特にリドリアスが襲つてくる気配が無

い。

「可愛いでしょう？」

突然のその声にフュイトとアルフは振り返るとそこには光があり、青い意思をグルグル回すと不思議な音が鳴り、リドリアスは何処か気持ち良さそうにしていた。

「リドリアスはね……。あつ、リドリアスってこの子の名前なんだけど。この音が好きなんだあ」

「へえ」

なぜかフェイトやアルフもその音を聞き、心が安らぐ感じがしていった。

だがその時、上空に光の粒子が複数現れた。

「なんだいアレ！？」

「綺麗……」

アルフとフェイトは粒子にそんな感想を述べるが、その粒子……「カオスヘッダー」はリドリアスに取りつく。

「キエヒエエー！！！」

「リドリアス！？ ビヅしたんだ！？」

急に苦しみ出すリドリアスに石を振りまわして落ち着かせようとする光。

だがリドリアスの顔は赤く、凶悪なものとなり、さらには爪が鋭く

なった「カオスリドリアス」へと変貌してしまつ。

「ギエヒヒーーー！」

カオスリドリアスは翼を広げて飛び立ち、市街地へと向かう。

「リドリアス！！ そつちはダメだ！！」

光は急いで街の方へ走る。

「あつ、待つて！」

「フェイト！」

フェイトとアルフもリドリアスが気になる為、光について行く。

カオスリドリアスは市街地に現れ、口から青い光線を吐きだして街を破壊していく。

「ギイイイイエエエーーーー！」

さらには戦闘機が現れ、カオスリドリアスに攻撃を仕掛ける。

「やめて…！ リドリアスを攻撃しないでくださいーーー！」

戦闘機に向かつて叫ぶが、そのパイロットは光の存在に気付く筈も無かつた。

「リドリアス！！」

光は石を振りまわしてその音をカオスリドリアスに聞かせ、カオス

リドリアスの顔は元のリドリアスの顔に戻るが、それだけでは戦闘機での攻撃は止まず、リドリアスは再びカオス化してしまった。

「リドリアス……」

カオスリドリアスは光に向かい、青い光線を放ってきた。

伏せて自分の死を覚悟する光

(これで……僕も父さんや母さんに、兄さんの所にいけるのかな？
いや、まだだ、まだ僕は……諦めない！！)

その時、光線が光に直撃するよりも早く、宇宙からきた青い球体に、光は包まれる。

そしてカオスリドリアスの光線は光のいた場所に直撃し、爆発が起きた。

だが、光は青い輝く空間の中にいた。

「光……、また会えたな」

光の前に現れたのは、青い身体を持ち、胸にゼロとも似たクリスタルがある巨人が光に話しかけた。

彼と巨人は1年前、ある戦いを通して絆を深めていた。

「すまない、光。君を助ける為といえ、まだ幼い君に……」

申し訳なさそうに謝る巨人。

「いいんだコスモス、僕はリドリアスを助けたい、僕に……リドリアスを助ける力を！！ 僕は君になりたい！ 真の勇者になりたいんだ！！ コスモオオオオス！！！」

光の持っていた石が変化し、コスモスの薔薇のようなステイック、「コスモブラック」を光は握りしめ、それを掲げるとコスモブラックは花を咲かせるように開き、青い空間から光は巨人と同化して「ウルトラマンコスモス・ルナモード」へと変身した！

「ショア！」

カオスリドリアスを戦闘機による攻撃から庇つ様に、コスモスが現れる。

コスモスは先程言った戦いで、英雄的存在になつてゐる為、戦闘機はすぐに攻撃を中止。

「キィイイーー！」

カオスリドリアスがコスモスにその爪で攻撃して來たが、コスモスは避けてカオスリドリアスの背後に回り込む。

「キエエエーー！」

「シユワツ！」

カオスリドリアスは腕を振るつてコスモスに殴りかかつたが、コス

モスは受け止めカオスリドリアスの腹部に右手をつけて押し返す。

「シェアツ！」

カオスリドリアスの攻撃は一切受けつけず、コスモスはカオスリドリアスの腹部を叩いて押し返して行き、カオスリドリアスは口から光線を放つがコスモスは受け止め、光線を弾く。

「へアツ！！」

コスモスは「ルナスル・アイ」という怪獣の体内を見る技で、リドリアスにとり憑いたカオスヘッダーの居場所を特定し、そこから光の光線「ルナエキストラクト」を放ち、カオスヘッダーはリドリアスと分離させ、カオスヘッダーは消滅した。

「キエヒヒ」

苦しみから解放されて嬉しそうなリドリアス。

コスモスは頷くと、両手を広げて青い光の波をリドリアスに注ぐと、リドリアスの身体は薄くなり、そこから消え去ってしまう。

実はこの技、リドリアスを人がいない無人島へと移す技だったりする。

「シェア！！」

そしてコスモスは飛び立ち、空の彼方へ消えて行つた。

フェイントとアルフは光の姿を見失い、先程のコスモスの戦いを見て

いた。

「あの怪獣、どこに行つたんだろう?……?」

「分かんないけどさ、取り合えず、ジュエルシードを探そうフェイ
ト?」

「……うん」

フェイトはリドリアスも気になるが、光のことも気になっていた。

彼がどこに行つたのか……。

*

一方、その頃、この森の中で赤い鳥の様な、顔の右側が金色のトサ
カとなつていてる怪人「アンク」が倒れこんでいた。

「うう……んっ? なんで俺は、こんな所に! ? 俺の意思の入つ
たコアメダルは映司が持つてる筈……!」

アンク……、「グリード」と呼ばれる怪人の一人であり、彼はその
中の鳥の属性を持つ者。

彼の身体は銀色のメダルである「セルメダル」と9枚揃うと事で完
全な復活をする為と身体を構成するメダル「コアメダル」で成り立
つ怪人であり、アンクはある戦いにおいて恐竜系グリード「ギル」
と「仮面ライダー オーズ」と共に倒したが、その時の衝撃のせいか、
異次元へとアンクの殆どのコアメダルは破壊され、さらには彼の意

思が入った割れたメダルはそのオーブが持っているのだが、何故か彼は此処に存在していた。

しかも、壊れた筈のコアメダルも一枚を除き、殆ど直っている。

「兎に角、歩いてみるか

取り合えずアンクは金髪のガラの悪そうな男性に変身し、歩き始めた。

第4話『パンツとメダルと強き太陽』（前書き）

挿入歌1「Time judged all」
挿入歌2「Touch the Fire」

カオスヘッダー
古代怪獣ゴルメデ
カオスゴルメデ
登場。

第4話『パンツとメダルと強き太陽』

アンクは海鳴市の街を歩き、辺りを見回してみる。

(……何故だ？ 普通なら俺の見るものは全て灰色にみえる筈)

グリードはメダルの怪物、即ち、なにを触っても、なにを見ても、なにを食べても、なにも感じない怪人である。

だが、そのグリードの一人であるアンクは何故かその逆になつていた。

普通ならば周囲に見えるもの全では灰色に見えるはずなのに、ちゃんと色がある。

ちやんと見える。

そのことが不思議でならなかつた。

(まあ、もう人間の身体を使うつて気分にはなれなかつたし、結果オーライって所か……)

さらばにアンクはある物を取りだした。

「なんでこれまであるんだか……」

その時だ、突然アンクは緑色の雷を喰らい倒れこむ。

それと同時に周りにいた人々は逃げ惑う。

「ぐつー！？」

だがすぐに立ち上がるアンク。

「誰だー！？」

「久しいなあ、アンク」

「お前は……！」

緑色の虫の怪人「昆虫系グリード・ウヴァ」である。

そり、みんなの「ウヴァ さん」である。

「ウヴァーー！ なんでテメーまでいるのか分からねえが、お前のメダルは持つてないぜ？」

「そんなことは知っている。 だが、お前には済えて貰おうと思つてなー！」

ウヴァの元にカマキリの性質を持つメダルで出来た怪人「カマキリヤマリー」、アゲハ蝶の性質を持つ「アゲハヤマリー」が現れる。

アンクは怪人体となり、アゲハヤマリー、ウヴァ、カマキリヤマリーに戦い挑む。

*

光の家では光は洗濯物を外で干しており、炎斬とナオキは家事の手伝いをしていた。

「所で光……」

「はい？」

ナオキが光に呼びかけ、ナオキはある質問を光にぶつける。

「なぜ、パンツしか干していないのだ？」

光が干してゐるのは全てパンツ（トランクスの）だった。

「いやあ、だつてパンツはかなり大事なものですから！ 明日のパンツをえあれば大丈夫なんですけど、予備とか必要かなつて」

ナオキは頭に疑問符を浮かべており、光はそのままパンツを干し続ける。

「予備つてどんだけいるんだよ、パンツ」

炎斬は冷やかなツツコミを入れた。

だが、その内の1枚が風で飛ばされてしまい、光は慌ててそのパンツを追い掛けた。

「あーっ！ 明日のパンツウー！」

「いや一枚くらによくねー？」

炎斬のツツコミは聞こえず、光はそのままパンツを追いかける。

その頃、海鳴市に近い山奥で1体の怪獣が地中で目を覚まし、偶然か必然か、地中を掘り進んで海鳴市に向かっていた。

*

一方、フェイトとアルフは今日もジュエルシードを探して気配が無いか街の中を2人で歩いていたのだが、その時、フェイトの元に1枚の布らしくものが降ってきてフェイトはそれを掴んだ。

「んっ？ なにこれ？」

フェイトが布を確認するとそれは……。

光が洗濯していたパンツだった。

「「ええ！？」「

フェイトとアルフは当然驚き、すぐさまそれを隠すかのようにします
いこむ。

「いや、なんで隠すのフェイト！？」

「だつて変な子と思われたら嫌だし……」

確かに、女の子がトランクスなんて持つてたらそう思われても仕方

が無いのだが、もつと変に思われそうな者がくることになる。

「僕のパンツ・ウカウカ……！」

泣きながら自分のパンツを探す光がフェイトとアルフの皿に入った。

「アルフ、あの子……」

「ああ、この間の奴だね」

フェイトはもしかしてと思い、光の元に駆け寄る。

「あ……あ、あのー」

身内以外で殆どじつやつて誰かと話すことが初めてのフェイトは困惑しながらも光に声をかけた。

「んっ？ あっ、君あの時のー？」

光が笑顔で「どうしたの？」と聞くとフェイトはトランクスのパンツを光に返した。

「君が持つてくれたんだあ！ ありがとうー！」

手を握られ、そこまで嬉しいのかと思つフェイトだった。

「えつと、じういたしまして……。それにしても、君無事だったんだ。それでの、リドリアスは……？」

フェイトはあれからずっとリドリアスの行方も気にになっていた。

「リドリアスは今、人のいない島で大人しく暮らしてゐるよ。コスマスのおかげで！」

楽しそうに話す光に、フェイトは「コスマス？」と尋ねる。

「コスマスを知らないの？」

フェイトは頷き、コスマスのことをフェイトと一緒にやつてきたアルフに話し始める。

その時、ウヴァーとヤミーの連帯攻撃を喰らって吹き飛ばされて転がりながら倒れこんだアンクが現れた。

「ぐがあ！？」

「な、なんだい今度は！？」

アルフがフェイトと光を庇う様に立つ。

それに気付いたアンク。

「お前等、危ないからすつこんだろ」

「えつ？」

光は怪人が自分達のことを気にかけるケースは珍しく、光はすぐにこの怪人、アンクが悪い怪人では無いことが分かった。

カマキリヤミーは両手の鎌でアンクに斬りかかるが、アンクは右手から炎を放ち、カマキリヤミーを攻撃。

「ギシャアアー！？」

しかし、その隙にウヴァアがアンクの背後に立ち、アンクの背中にウヴァアは腕を突き刺す。

「うぐう！？」

「背中がガラ空きだぞ、アンク！！」

そこからアンクのコアメダル2枚を奪い取るウヴァア。

さらにアゲハヤミーは空中から鱗紛をアンクに浴びせ、アンクの身体は火花を散らす。

「ぐわあ！？（クソッ、3対1な上にこっちはメダル2枚失った…、どうするか）」

「うおおおー！」

すると光が太い木の枝を持つてウヴァアに叩きつけた。

「なんだガキ？ 関係無い奴は引っこんでいろ！」

ウヴァアは光を払いのける。

「うわっ！？」

フェイントとアルフが光に駆け寄る。

「大丈夫？」

「う、うん、平気」

光は立ち上がり、ウヴァアを睨みつける。

「関係あるよ、そここの怪人、僕等のことを守ってくれてる。だから関係ある、今からの付き合いだし！」
(あいつ……少し似てるかもな、映司に……)

アンクは鼻で笑うと光にあるものを投げ渡した。

「これは……？」

「バカな、何故それまで！ そいつを寄こせー！」

ウヴァが光にアンクから投げ渡されたものを奪おうとするが、黒い衣服に身を包んだフェイトが鎌型のデバイスと呼ばれる魔法を使うもの、魔導師が魔法を発動する時などに必要なアイテム「バルディッシュ・サイズフォーム」でウヴァを斬りつけた。

「ぐわああーーー？」

「君は一体……？」

「話は後で！」

さらにはアルフが魔力で出来た弾丸、魔力弾をカマキリヤミーに放つ。

「空中にいる奴は私とアルフが！」

「お前、これ使えーーー！」

アンクが赤いメダル3枚を光に投げ渡す。

「楽して助かる命が無いのって、やつぱりどいつも一緒になのかな？」
(はんー、とことん似てやがるかもな)

光はアンクに渡されたものを腰に装着すると帯が伸びてベルトとなり、ベルト……「オーズドライバー」の中央に3枚のメダルを入れて右腰にあるオーススキヤナーと呼ばれるアイテムを手にとり、それと同時にドライバーの中央を傾けてオーススキヤナーで中央をスキヤン。

「変身……」

『タカ！ クジャク！ コンドル！ タージャードル～！』

頭はタカを思わせる「タカヘッドブレイブ」、胴体はクジャクを思わせる「クジヤクアーム」、下半身がコンドルを思わせる「コンドルレッグ」、そして胴体の中央には鳳凰を思わせるマークがあり、赤い姿……「仮面ライダー・オーズ・タジヤドルコンボ」に変身した。

「はああ……！」

「キエヒヒヒ～！」

カマキリヤミーがオーズに攻撃を仕掛けるが、オーズは軽くかわし、カマキリヤミーを殴りつける。

「ハッ！」

「ぐわあ～？」

ウヴァアが爪型の武器でオーズへと斬りかかるがオーズはウヴァアの腕を掴んで受け流し、両手でウヴァアの腹部を殴りつける。

「やあああ～！」

「ぐおう～？」

その戦いを見ていたフェイトは、昨日のコスモスの戦い方と似てい

ると感じていた。

「余所見をするな……」

アゲハヤミーがフュイトに鱗紛を放つがフュイトはプロテクションというバリアで防ぎ、フォトンランサーといつ金色の魔力弾をアゲハヤミーに放つ。

「フォトンランサー」

「ぐふうーー？」

さらにはアルフがアゲハヤミーに接近してアゲハヤミーを思いつきり殴る。

「おりやああーー！」

「ぐはあーーー？」

ウヴァは炎属性が弱点、つまり、タジヤドルの属性は「炎」、オーズの方が有利である。

しかし、ウヴァは触角から緑の電撃を放つてオーズを近づけさせない。

その隙にカマキリヤミーがオーズを捕え、ウヴァがオーズに攻撃を喰らわせようと接近するが、アンクの放った炎に吹き飛ばされるウヴァ。

「ぬわあーー？」

そしてオーズはカマキリヤミーから無理やり抜けだし、強烈な蹴り

をお見舞いした。

「やあああーー！」

バルディッシュを斬りつけられ、アルフは強烈なパンチをアゲハヤミーに喰らわせ地面へと倒れこむ。

「ぐううーー？」

カマキリヤミー、アゲハヤミーの2体が揃つた所でオーズとフェイトは一気にトドメと行く。

『スキヤニングチャージー！』

オースキヤナーで再びドライバーをスキンし、オーズの背中に翼が現れえてオーズは飛行しコンドルレッグはコンドルの足のように変化し、その足で敵を切裂く「プロミネンスドロップ」と、フェイトの放つた魔力刃「アークセイバー」を2体のヤミーは喰らい爆発した。

「「ぐわあああああーーーー？」」

「チツ」

舌打ちしたウヴァはすぐにどこかへと走り去る。

変身を解くと光は倒れこんでしまう。

「ううう……」

「あつ、だ、大丈夫！？」

フェイドが光を心配するが、アンクが……。

「心配すんな、コンボは体力を削るが命に別条はない」

それを聞いてフェイドは安心するのだった……。

だがその時、突然地響きが鳴り、地中から1体の巨大怪獣、「古代怪獣ゴルメテ」が出現。

「グオオオオ！…」

「ほお～、あれが怪獣ってやつか」

アンクはゴルメテを興味深そうに見ている。

「それより早く逃げないと……ー」

だが、光が身体を起こして立ち上がった。

「早く……怪獣を大人しくさせないと……、また攻撃されちゃう」

疲れ切つた声で光はコスマプラックを取り出す。

(あつ、でもこの子達がいるし……。どうしよう)

ゴルメテは口から火球を吐きだし、暴れ出す。

「グオオオオン！…」

(此処は……！)

光は突然走り出し、慌ててフェイド、アルフ、アンクもそれを追う。

「ちょ、ちょっと待つて！」

「おい！！ 僕のメダル返せ！！」

光は3人をなんとか巻き、コスモプラックに語りかける。

「早くなんとかしないとまた怪獣が攻撃される。だから、力を貸して、コスモオオオオス！！」

コスモプラックを掲げると、コスモプラックが開き、青い光の中から「ウルトラマンコスモス・ルナモード」が現れた。

「シェア！」

「グルウ？」

ゴルメデはコスモスを睨みつけ、ゴルメデはコスモスに向かい突進していくがコスモスは避け、ゴルメデはコスモスが突然いなくなつたように思いこみ辺りを見回す。

「グウ？」

後ろを振り返るとコスモスがあり、「ゴアッ！？」と鳴き声をあげて驚いた様子。

ゴルメデはコスモスに殴りかかるがコスモスは受け流し、両手でゴルメデの腹部を叩いて押し返す。

「シェア！」

「グオオン！！」

「ゴルメデから距離をとり、右手から相手の感情を鎮める光の光線「フルムーンレクト」をゴルメデに放ち、ゴルメデは大人しくなる。

「グオオオ……」

コスモスは頷き、リドリアスと同じ島に移そつと前回の技を出そうとした時、空中から光のウイルス、「カオスヘッダー」が現れてゴルメデに取りつく。

「ギオオオ！－！－？」

「デヤツ！？」

カオスヘッダーはゴルメデにとり憑き、ゴルメデの生体エネルギーを吸収してゴルメデから離れる。

助けに行こうとしたコスモスは間に合わず、カオスヘッダーはゴルメデに酷似した凶悪な赤い頭を持つ「カオスゴルメデ」となつて実体化した。

「ギオオオオ！－！」

弱り切つたゴルメデに火球を放ち、直撃を受けたゴルメデは倒れてしまい、目を閉じた……。

「はつ！」

「コスモスはゴルメデに駆け寄り、抱きかかえるが、既に息は無い。

カオスゴルメデを睨みつけるコスモス。

「ハアア……シェア！！」

コスモスは拳を握りしめ、右手を掲げ、振り下ろすとコスモスの姿が変わり、赤き強さの姿、「ウルトラマンコスモス・コロナモード」にモードチェンジした。

「シェア！！」

カオスゴルメデに向かい走つて行くコスモス。

「ギイオオ！！」

火球を放つてくるカオスゴルメデだが、コスモスに当たらず、コスマスは飛び上がってカオスゴルメデの背後に立ち、尻尾を掴んでスイングし投げ飛ばす。

「デアアツ！！」

「グルウ！？」

コスマスとカオスゴルメデは掴みあいになるが、コスマスはカオスゴルメデを掴みあげて背負い投げを繰り出した。

「ヘアツ！！」

「グアア！？」

ヨロツと立ち上がるカオスゴルメデに、コスマスは両手を前に突き出して放つ必殺光線「ブレージングウェーブ」が放たれ、直撃を受けたカオスゴルメデは爆発四散。

「グオオオオオ！？」

コスモスは「ゴルメ」を持ち上げ、空に高く飛び去った。

「シユアー！」

*

光はフェイト達と再び会い、光は急にいなくなつたことを謝つていた。

「そういえば、名前まだ言って無かつたね。 僕は風上光」

「フェイト・テスター・ロッサ、こつちはアルフ」

光とフェイトは自己紹介し、アルフは「よろしく」とだけ言い、その後ろにいるアンクに目をやる光。

現在、アンクは人間態である。

「もしかして……さつきの怪人？」

「ああ、それよりさつさとメダルを返せ……！」

アンクに言われた通り、メダルを光は返し、その後フェイト達と別れてアンクは行く所が無いようなので光の家に居候することになつた。

因みにアンクは格好のせいか、炎斬とナオキから警戒されていた。

第4話　『パンツとメタルと強き太陽』（後書き）

次回はゼロサイドに戻ります。

第5話『アンドロイド少女の誘拐』（前書き）

今回はオリジナル怪獣（？）が～。

後ヒットソングヒストリーのネタが……。

アンドロイド少女ゼロワン
ビッグゼロワン

登場。

第5話『アンドロイド少女の誘拐』

「ラン達となのは達は話しあつた後……。

なのははコーコーに協力して危険な力を持つジュエルシードを封印する為、コーコーの手伝いをすることに。

それにはランと鏡太も協力することにななつた。

コーコーはワザワザ危険な世界に来ることは無いとランと鏡太に訴えるが。

「ふざけんな、危険な世界なんぞとつゝに入つてるんだ。」
退いてたまるかよ

「ランの言つ通り、それに、コーコーくんを責める訳ではありませんが、レディにそんな危険なことをわせるのを放つておく訳には行きません。」これも騎士の務めです

「ランと鏡太が言い、なのはとコーコーは「有難うござまゆ」とお礼を言つ。

「まあいいけど、なのはは見た所俺と同じくらいだろ? 敬語じやなくていいぜ、コーコーは幾つか知らねえから言こようがねえけど」

なのはは「うん、分かった」と笑顔で答える。

「コーコーくんが例え幾つでも、あなたは田上の人には敬語を使わないでしょ?」

鏡太にツッコまれ、ランは「つるせえ！？」と反発。

「まあ、確かに彼等の協力がある方がジュエルシードは集めやすいね。人数が多い方がいいからね」

ライトが言い、その後、ランと鏡太、なのはとライトとユーノはそれぞれ自分の家に帰つて行つた。

トウモローリサーチに帰ると竜也が2人がいなくなつたことを心配しており、ランと鏡太を叱るのだつた……。

「申し訳ありません、竜也さん……」

「わらい」

「でも、無事でよかつた。今度からこんなことすんなよ？」

2人は竜也に頭を撫でられた後、3人は眠りについた。

*

翌日、ランが外を散歩している時、学校帰りなのか、なのはが神社の階段を登つて行くのが見えた。

「よお、なの……」

なのはと言いかけたが、ランは神社の階段の一番下におり、なのはは結構上の方まであがつている。

つまり、今、ランが上を見上げればなのはのスカートの中が見えるところ訳で……。

「うーーー？／＼／＼／＼

すぐには顔を伏せるラン。

なのはが上へと上がり、姿が見えなくなつた後、ランも階段を上りなのはを追い掛ける。

流石はウルトラマンレオの弟子といふべきか、階段を上るなどあつところ間であり、そこではなのはと肩に乗つたコーンが田の前に四足歩行に田が4つある獣のようなジューハルシードひとり憑かれた怪物がなのはと対峙していた。

「なのは……」

「ランくん！？」

「こいつ、ジューハルシードの……」

コーンがなのはに呪文を唱える様に囁つが、あんなに長いのを覚えている筈もない。

「もう1回教えるからそれに続けて！」

「じゃあその間、俺が時間稼ぎしとくぜー！」

ダブルドライバーを腰に装着し、ジョーカーメモリを取り出す。

「ライト……」

ダブルドライバーをランが装着すれば同じものがライトにも現れ、意識を共通することが出来るが……。

『ああ、ちょっと後にしてくれないか？ 今『餅』というものを検索中なんだ！』

餅についてなにか興味深そうに調べているライト。

「はあ！？ んな」と言いつてゐる場合か！？

しかし、そういうしてゐる間に怪物がラン達に襲い掛かってくる。

「仕方ねえ！？」

左腕のウルティマイトブレスレットからウルトラゼロアイを取りだして目に装着。

「デュア！？」

ランは等身大のウルトラマンゼロに变身し、ゼロの姿を初めて見るなのはは「ふえええ！？」と驚いていたが、ゼロは襲い掛かってきた怪物を掴みあげ、地面へと投げ飛ばして叩きつける。

「デュア！？」

ゼロはなのはに振り返る。

「今の内に呪文とかつてのを教えてやれ！！」

「う、うん！」

ゼロが再び怪物に立ち向かおうとした時、怪物はゼロの真上を飛び越えてなのはに襲い掛かってきた。

「きやああーーー？」

「なのはーーー！」

だがその時、なのはの持っていたレイジングハートが輝きだし、宝石から杖の姿に変わる。

(パスワード無しでーーー?)

襲い掛かってくる怪物を見てユーノは急いで防護服、バリアジャケットを纏うようになのはに言つ。

「ええっと……ーーー？」

『スタンバイレディ』

レイジングハートから音声が鳴り響き、なのはが桃色の光に包まれて怪物は光にぶつかる。

「なのはーーー！」

先程の衝撃の際に吹き飛ばされ、無事着地したユーノとゼロがなのはに向かい叫ぶが、なのはは膝を突き、ホツとした表情をしていた。

「グルアアアーーー！」

怪物がなのはに飛びかかるが、なのはは「きやあ！？」と悲鳴をあげながら咄嗟にレイジングハートを掲げると障壁が張られ、怪物の攻撃を防ぐ。

その際の衝撃で怪物はぐつたりと倒れこみ、気を失つ。

（防壁で衝撃を……、彼女にはかなりの素質があるかもしれない）

とユーノは思つており、なのはのことをかなり高く評価していたのだ。

魔法の才能があると。

「なんだよ、俺変身したのにこんだけか？」

「ウンの姿に戻つたゼロ。

その隙になのははジュエルシードを封印、ジュエルシードにとり憑かれていた犬は無事解放される。

「えつと、じんな感じでいいのかな？」

「うん、出来過ぎつてくらいに」

ユーノに褒められ、なのはは頬を赤くして「えへへ」と笑つていた。

*

その頃、鏡太も同じくランとは別の方向で散歩をしていると、すずかとアリサが2人の同じ顔をした金髪の女性に抱がれ、人間とは思えない程のスピードで走つて行く。

「ちょっと話しなさいよーーー？」

「どこに連れて行くの！？」

アリサが怒り気味に、すずかは不安気に、女性に言つが女性は何も答えず、ただ走るだけ。

「これは助けなければ！ テレパシーでランに伝えましょ！」

ミラーナイト、グレンファイヤー、ウルトラマンゼロの3人はテレビで会話することも出来るため、鏡太はランにそのことを伝えた後、人目を気にする場合では無いので隣に停めてあつた車の窓から鏡の中に入り、そのまま鏡の中からミラーナイトに変身。

「この姿になるのも久しぶりですね」

ミラーナイトは飛行してアリサとすずかを拉致した女性を追い掛ける。

そしてとある廃工場ですすかとアリサを縄で縛つた女性2人。

「私達をどうする気よ？」

アリサの質問に、片方の女性が答える。

「有機生命体は抹殺する……。だからお前達も抹殺する。しかし、それは後回し、誰でもいいから囮に捕まえ、奴等おびき寄せて罠にはめる」

その誰でもいい人質を捕まえる際鏡太に見られていたが……。

「奴等……？」

首を傾げるすずか。

「ていうか抹殺ですって！？ ふざけないでよーー！」

アリサが女性2人を睨みつけて怒鳴る。

「こいつを黙らせろ」

右の女性が左の女性に言い、左にいた女性は拳をアリサに振りかざし、アリサは目を瞑つたが、何時までも痛みは来なかつた。

恐る恐る目を開けると、目を見開くすずかと、アリサの目の前では女性の腕を掴んでいるミラーナイトが映つた。

「親ならまだしも、見ず知らずのあなた達に……しかも誘拐犯にこの子達を叩く権利は無いと思いますが？」

ミラーナイトは女性を殴り飛ばし、2人を縛っていた縄を無理やり千切る。

「今の内にお逃げください」

「あ、有難う……」

「あなた……なんなの？」

「逃げることが先決です。恐らく奴は人間では無い……、」

私にお任せを」

すずかとアリサは戸惑いながらも頷き、出口に向かつて一直線。

そこには警備としていたやはり彼女達と同じ顔をした女性がいたが、全てミラーナイトが倒していた為、すぐにアリサとすずかは外に出ることが出来た。

それと入れ替わるように天井から等身大のウルトラマンゼロが参上する。

「ショア！！」

ゼロは女性達を見て「んんっ？」と目を疑う。

「どうしました？」

「あつ、いや、以前親父含めるウルトラ兄弟の戦いの歴史『レジュンドブック』っていうのを見てた、その中にこいつ等がいたんだよ、確か名前は……」

『『アンドロイド少女ゼロワン』』

それが彼女達の名前である。

指先から怪光線を放つてくるゼロワンの体。

しかし、ゼロとミラーナイトはかわし、ゼロはゼロスラッシュガードをゼロワン一体に投げつけて真っ一つに切裂かれ、ミラーナイトは手から放つナイフ、「ミラーナイフ」をもう一体のゼロワンに放つて2体は爆発。

「呆氣無かつたぜ」

「いや、まだです！」

するとミラーナイトに倒された警備をしていたゼロワン達のパートと、先程倒されたゼロワンが融合して巨大なゼロワンになるが、顔は銀色の仮面をつけている「ビッグゼロワン」へと変身した。

【.....】

ビッグゼロワンは何も言葉を発さず、屋根を突き破つてゼロとミラーナイトが出てくるのを待っていた。

ゼロとミラーナイトはビッグゼロワンが巨大化する際に工場から出ており、ゼロ達はビッグゼロワンを見上げる。

「待つてんのか？　へつ、だつたら俺が相手してやるぜーーー！」

ゼロは巨大化し、ビッグゼロワンがゼロに素早く殴りかかってくるがゼロはその腕をギリギリ受け止める。

(早えーーー)

ビッグゼロワンはさらに膝蹴りをゼロに繰り出すがゼロは直撃する前にビッグゼロワンから離れる。

「先制攻撃とはやつてくれるじゃねーか。だがな、本当の先制攻撃つてのは……本当の主役始まるんだぜ？ ディアー！」

【……】

ビッグゼロワンはゼロの頭にゼロスラッガーが無いのに気付き、ビッグゼロワンの背中と右腕をゼロが操るゼロスラッガーに切裂かれれる。

【……！？】

右腕はゼロスラッガーの攻撃により斬り落とされ、片腕だけとなるがビッグゼロワンは指先の胸から怪光線をゼロに放つ。

その光線は右や左に曲がったりなど「から来るか予測不能だった。

「なに！？」

光線を全て喰らったゼロは吹き飛ぶ。

「おわあああ！？」

「ゼロ！？」

ビッグゼロワンは背を向けて何処かに去りとするが……。

「なんだ？ 勝ったつもつか？」

【……！？】

ビッグゼロワンが振り返ればそこにはダメージを受けながらゼロ

が立ち上がっていた。

「効かねえんだよ……、銀河の彼方にぶつ飛ばしてやるぜーー！」

ビッグゼロワンが怪光線を放とうとするが、それよりも早くゼロが動き出し、すぐにビッグゼロワンの懷に潜り込んで拳を下から上に向かい振り上げる。

「貰つたアー！ シェアー！」

アッパー・カットをビッグゼロワンに炸裂させ、そのまま空高く殴り飛ばされ、ゼロスラッガーを手にとつて融合させ、三日月型の剣「ゼロツインソード」を作りあげ、ビッグゼロワンを追い掛けてゼロは飛行し、ゼロツインソードで切裂く必殺技「プラズマスパーククラッシュ」をビッグゼロワンに炸裂。

「ブラックホールが吹き荒れるぞおーー！」

【……！？】

切裂かれたビッグゼロワンは空中で爆発し、地上にいるミライナイトにサムズアップした後、ゼロは消え去り、地上に戻つてランの姿に戻つた。

ミライナイトも鏡太の姿に戻つており、彼等はトウモローリサーチに帰り、翌日。

「ラン、鏡太、君達にお客さんだよ？」

竜也が一コ二コした笑顔で部屋に入ってきたのはなほだつた。

手には一つの箱を持っている。

「「なのはーーなのはさん！」」

「えっと、これこの前助けて貰つたお礼です」

笑顔でケーキの入った箱を差し出すのは。

「別に大したことはしてねえよ、結局最終的に解決したのお前とそれをサポートしたユーノだろ」

そっぽを向いて咳くラン。

「うん、だからユーノくんにもお礼はしたよ？　それに私一人じゃどうにもならなかつたし、だからお礼」

「人の行為は素直に受けるものですよラン？」

鏡太にも言われ、ランはなのはから箱を受け取つた。

「有難う」

「お礼を言つるのは私の方、有難うランくん」

第5話『マンドロイヤド少女の誘拐』（後書き）

レジ・ヒンデブックはウルトライアンの戦いの歴史を1から全部見たところだ……。

無品のラスボスは、あのダイナを一度は倒したロボに似た奴に……。

ゼロワンドロボ……ですよね？

マンドロイヤドだし

第6話『温泉激闘』（前書き）

フォーゼが出るんだつたら「温・泉・激・闘」になるのにな……。
とこうびーでもいい駄き。

今回は飛ばして温泉の話に。

そしてランの見た田はあれなので……。

エースキラー
登場。

第6話『温泉激闘』

今回は竜也がクジで温泉を当てた為、竜也、ラン、鏡太は温泉旅行へ！

「温泉ですか、私は入ったことが無いので楽しみですね」「ああ、俺も！」

ランと鏡太は温泉に入ったことが無いので楽しみにしていた。

バスに乗つて3人は海鳴市温泉に向かつておい、竜也が温泉の良さについて語つてやり。

「温泉つていいよ。普通の風呂とはまた違うからな！」

2人にサムズアップを見せて竜也も旅館に着くのを楽しみにしているのだった。

「んっ？なんか忘れてるような……、まあいいか

ランが何を忘れていたのか、それはグレンファイヤーとジャンボット、炎斬とナオキの2人の捜索である。

まさに「焼き鳥はどうでもいいが姫さん返せ！」状態なのである。

*

その頃、光は高町家と交流が合つた為に高町家の人に誘われ、炎斬とナオキを引きつれて高町家の人に達 + すずか & アリサと月村家のメイドとすずかの姉の忍でラン達と同じ温泉旅行に向かつていたのだ。

アンクは行きたく無いらしく、家に留守番中。

そして温泉に到着してなのは達はラン達と出会い、そうなると強制的に炎斬とナオキの居場所が分かる訳で……。

「ケーンー！ ジャンボットー！」

という訳でここでラン、鏡太は炎斬、ナオキと再会し、再会を喜び合っていた。

「炎斬さん達の仲間つてこの人達だつたんですね」

光はラン達に挨拶した後、一同は温泉に入ることに。

「ユーノくん一緒に入ろうね」と

なのははユーノを抱えており、一緒に女風呂に連れて行こうとする。

「キノー！ キノー！」

ユーノは顔を赤くして必死になのは腕から逃れようとする。

「お風呂入るの嫌がつてゐのかしらね?」

アリサがユーノを見ながら言い、ユーノはランと鏡太に助けを求める。

だが2人の目は……「すまん」と言つてゐる目であり、ユーノは半分諦めかけたが……。

「ランくん達も一緒に入ろうよー 10歳以下なら一緒に入れるし」

無邪気な笑顔でそんな提案を出すなのはにランと鏡太と炎斬は吹き出しそうになるが我慢して耳を疑う。

「今、なんと?」

「だから一緒に入ろうよー!」

ランは必死に遠慮するが、なのはに腕を掴まれ引きずられる。

「ちょ、おい!?」

「鏡太くんは?」

すずかは首を傾げながら鏡太に尋ねる。

「そんな、今会つたばかりなのに一緒にといつのは……」

鏡太も遠慮がち。

「ライトもいつちね～？」

なのはがライトもくるように誘つ。

「まあ、僕はどっちでも構わないけど」

ライトの性格上、女性の裸など興味が無さそうだった。

「私達は別に構わないよ？ ねつ、アリサちゃん？」

「ええ、別にいいわよ」

しかし、流石は騎士といふべき所か、騎士らしく断る鏡太。

「申し訳ありませんが、私には女性の方と共に入浴するというのを断ろうかと思います。 私には女性の素肌を見るという権利はございませんから」

「じゃあ俺は！？」

ランが鏡太に手を伸ばして助けを求めるが鏡太はランを無視。

「無視すんなコラア！！」

「因みにユーノは動物といえど一応雄、ユーノも同じくこちらに」

なのはからユーノをヒヨイと取り上げ、なのは、アリサ、すずかは「えー」という表情だったが、鏡太は頭を下げた後、男湯の方へと向かう。

「オンドウルラギッタンディスカー！…？」

ランが鏡太に向かつて叫ぶ。

「ランを助けないのはあなたが金髪勇者似なので……」

「ここやかに笑いながらそんな事を言いだし、ランは「そんな理由か！？」と鏡太に怒鳴るが、そのままなのはに女湯に連れて行かれた。

「まつ、諦めたまえ」

「じゃあ俺もそっちここ……」

「アンタはダメ！」

炎斬が女湯に向かおうとしたがアリサに止められる。

「なんであいつはよくて俺はダメなんだ！ 同じくらいいだろ……」「

「アンタ完全に下心丸見えなのよね」

「下心なんかねえよ！ 誰がお前みたいなガキの裸見てえんだよ！」

「！」

今炎斬の言葉で完全に下心丸見えのが分かつた。

「つまり、美由紀さんとかならいい訳ね？」

ジト目で炎斬を見るアリサ、炎斬は「しまった」という顔をしており、ナオキに首根っこを掴まれて男湯に連れて行かれた。

「おい離せ！！ 焼き鳥！！ 燃いて食つちまうぞ！！」

「この無礼者！！ 何度言えば分かる！！ 焼き鳥では無くジャンボットだと言つていろだろつーー！」

そしてランを除く男性陣は男湯に入った。

「良い湯ですね、恭也さん」

「ああ、ホントにな」

恭也と鏡太はそんな会話をしており、炎斬は壁に耳を当てて隣の女湯の様子がどうなつてゐるのか聞こいつしていたりした為、ナオキに殴られ壁から引き離した。

「それにしても、ラソは今頃いに思いしてんなのかな」

竜也が笑いながらランのことを考へる。

「所で、先程から気になつたのですが……」

「んつ？」

鏡太が右の方向に指を差して恭也にあることを尋ねる。

「あの、あれはなんですか？」

その指を差す方向には胸に信号機をつけた青い身体のロボットのような「シグナルマン・ポリス・ゴバーン」が頭にタオルを乗せて湯に浸かっていた。

「あ～っ、生き返るなあ」

「おっ、シグナルマンさん！」

竜也はシグナルマンに呼びかける。

「おう、竜也じゃないか！」
(知り合いかなんですか！?)

このシグナルマンは「激走戦隊カーレンジャー」と共に地球を守つたスーパー戦隊の一人、シグナルマンなのである。

宇宙警察なのだが、今は休暇中らしく、シグナルマンの妻と息子も来ているらしい。

「息子さんは？」

「いやあ、実は本官2回も温泉に入つてゐるので、その1回田の時に息子と……」

ユーノは鏡太に助けられたことのお礼を言つており、鏡太は……。

「二度、三度のリードおもてなしで、あせこ

となにか黒笑みを浮かべていた。

一方女湯では……。

— / / / / / / / / / / —

顔を真っ赤にさせたランがいたとか。

「ランくん背中洗つてあげようか~?」

タオルを巻いたなのはがランの腕を掴んで背中を背中を洗おうとする。

「……自分でやるから」「…………」

抵抗するランだが、その際右手が……。

『ムニコ』

「ムニコ……？」

「ふにゃー？／＼／＼

ランが自分の右手を見るべ、ランはなのはまだ成長途中の胸を触つてしまつた。

「あつ……えつと、すいませんでしたああああああ……／＼／＼

／

「おや、ランも以外と大胆なんだね」

ライトがそんなことを呟きながら、外の風景などを眺めていた。

*

その後、顔がかなり真っ赤になつていていたランとなのはだが、炎斬達は特に何も聞かず、ラン、鏡太、炎斬、なのは、アリサ、すずかが廊下を歩いていた時。

とそこにアルフが通りかかつた。

「は～い、おチビちゃん達！」

「んっ？」

アルフがなのはを眺め……。

「ふうん、君かね、ウチの子をアレしちやつてくれるのは
「なのは、知つてゐる人？」

アルフを睨みながらアリサがなのはに尋ね、なのはは首を横に降る。

「あんまり賢そつにも強そつにも見えないけどねえ」

「先程からなにを言つてゐるのか分かりませんが、大の大人が子供に向かつて1体なんなのです？」

鏡太が一步前に出てアルフを睨みつける。

「おうおうおう！――なんだテメーは！――なのははお前のこと知らねえつて言つてゐるぞ！？」

「おい、落ち付けお前等」

ランが炎斬と鏡太を静める。

「人違ひじやないんですか？」

アリサの言葉でアルフは急に笑い出し、「そうだった、『ごめん』と謝つた後そこから去つていくが……その際なのはの耳元で「あんまり邪魔するどガブツと行くかもよ？」という発言をしており、なのははアルフの後ろ姿を見ていた。

一方、光は……。

「まさかこんな所でフェイドさんに会うとは思わなかつたな～」

林の中に隠れて枝の上に座っていたフェイトを光にこいつも隠れてるはずなのにあつさつ見つかり驚きを隠せないフェイト。

フェイトは田を見開いて驚いていたが、光はフェイトに会えて嬉しかった。

「なんでこんな所に?」

フェイトが光に尋ねると光は懐から蝶ガラのパンツを取り出す。

「いやあ、また飛んで行っちゃって。それを追い掛けたらここに来ててね」

何なのだらうか光のパンツは、飛んで行く度にフェイトの元に辿り着く。

「や、やつ」

だがフェイトも光と再会して少し嬉しい気分もあった。

「やう言えばまだ聞いて無かつた。アレはなに?」

アレところのは恐いく魔法のことだらう。

フェイトは一瞬話すかどうか迷つたが、光ならば大丈夫だらうと思いい、全てを話した。

自分は別の世界からきたこと、母親に頼まれてジュエルシードを探していることなど。

「そつかあ、僕も手伝つていい！？ ほら、僕仮面ライダーだし、
にか力になれると思うんだ！ アンクから3枚メダル借りてるし」

と光はタカ、クジャク、コンドルのメダルを見せる。

アンクが念の為に持たせたのだろう。

しかし、以前のアンクなら自分のメダルを3枚も貸すなど有り得なかつたこと。

以前オーズになっていた人物の映司が見たら驚くか喜ぶかするだろう……。

だがフェイトはどうしよう…… つと悩み所であつた。

でも断つてもしつこすぎだな…… と思いフェイトは渋々承知。

「よかつた」

*

その夜、この温泉の林の中にあるジュエルシードをフェイトは起動させて見つけ、それを封印してそれに気付いたのは、ユーノ、ラン、鏡太、ライトが急いで駆けつけた。

「あれ？ もう一人の魔導師ってのはなんだったの…？」

実は以前なのはがすずかの家に遊びに行つた時、そこにジュエルシードがあり、他の人達にはバレなかつたがフェイトとなのははジュエルシードを巡つて争つていたのだ。

「光くん！？ どうしてそこ…………？」

光がフェイトの元にいることと、あの時の女性アルフがいることこののは達は驚いていた。

「えへっと、これは……そのつ」

田を泳がせてなんて言えばいいのだろうと迷う光。

「なぜジュエルシードを集める必要があるんだい？」

「それは危険なものなんだ…！」

ライトがフェイトに質問し、ユーノは危険なものであることを訴えるが、フェイトは答えるつもりは無い。

「あなた達には関係無い」

なのはは出来るなら話し合いで解決したかつた、だがフェイトは。

「私はジュエルシードを集めなければならない。 そしてあなたもジュエルシードを狙うなら私達は敵同士つてことになる」

「だから、そうやって決めつけない為に話し合いつて大切なんだと思つ……」

「言葉だけじゃ、伝わらないから。 だから賭けて、お互ひのジュ

「エルシードを一つずつ」

フェイトはバルディッシュュをサイズフォームにしてなのはに斬りかかるがなのははすぐに飛行して避ける。

しかし、気付けば既にフェイトがなのはの背後におり、バルディッシュュを振りかざすがなのははレイジングハートで受け止める。

「気付かれた………？」

まさか自分のスピードになのはが反応するとは思っていなかつたフェイト。

「えへへ、ランくんと鏡太くんに鍛えて貰つた成果かな？」

実はなのはは前回フェイトにボロ負けした為、ランと鏡太に頼み、自分を鍛えて貰うよついに言つていた。

そして今、その成果が表れている。

一方、アルフはオレンジの狼の姿となり、ユーノと鏡太と対峙している。

ユーノの説明によるとアルフは「使い魔」と呼ばれる者らしく、主である魔導師に仕えている。

林の中でアルフとユーノと鏡太は戦い合い、隙をついてユーノに喰らい付いたが。

「おぶいーーーーー？」

それは鏡に映つていたユーノであり、鏡にアルフはぶつかったのだ。

「いつたあ～！？」

後ろを振り向くとそこにはハーナイトになつた鏡太があり、両手を広げていた。

「鏡を作るのは得意でね、知らなかつたかい？」

その隙にユーノがバインドという拘束魔法でアルフを拘束。

「ぐつ、しまつた！？」

しかし、それをオーナーのタジヤードルコンボに変身した光が引き千切る。

「はああーー！」

だがそこにダブル・サイクロンジョーカーに変身したランとライトがオーズに蹴りを入れる。

「うわー！」

『どういうつもりだ風上光、それになぜ君がライダーの力を……？』
「すいませんけど、僕の口からじゃ言えません！」

そこに丁度、炎斬とナオキも駆けつける。

「なにしてんだお前等！？」

「お前等は手を出すな……」

ナオキと炎斬は状況が掴めずにおり、置いてけぼりだつた。

オーズはダブルと取つ組み合いになり、それぞれが戦い合ひ、しかしその時……。

なのはとフェイトに向けて何者かが発砲、2人は障壁で防ぎ、2人を襲つたのは銀色のロボット……かつて「仮面ライダー・ブラックR-X」がかつて戦つた全人類を抹殺しようとした「クライシス帝国」の怪人、「怪魔ロボット・シユバリアン」が銃口をなのはとフェイトに向けていた。

「ジユエルシードとやらを渡して貰おうか」

そこへ……竜也の飛び蹴りがシユバリアンに炸裂。

「ぬおつ！？」

「竜也さん！？」

さらにはここにシグナルマンも駆けつける。

「なにがあると来て見れば……後で署で聞かせて貰うぞ……」

「つて今日休みでしょ？」

「あつ、そうだった」

竜也は取り合えず事情は後で聞くことにし、腕のブレスレットを構えて叫ぶ。

「クロノチョンジャー！！！」

すると竜也の姿は変わり赤い姿の戦士、未来戦隊タイムレンジャーの「タイムレッド」に変身した。

「タイムレッド!! なんかよく分からぬけどさ、真剣勝負……してるんだよね? だったら邪魔しないように俺とシグナルマンがするよ!」

胸を叩いて「俺に任せろ」と言った後、タイムレッドはシグナルマンと共にシュバリアンに向かって行く。

「行くぞ!!」

「シグナイザー!! ガンモード!!」

銃型の武器「シグナイザー・ガンモード」でシュバリアンを撃ち、タイムレッドは今は「き、友より授かった「DΛVデイフェンダー」とこう銃型の武器を手にとり、レーザー光線をシュバリアンに放つ。

「ぐあああ!!?」

「DΛVデイフェンダー!! デイフェンダーソード!!」

剣型の「デイフェンダーソード」に変形させ、シグナルマンと共にシュバリアンと戦い合つ。

「チツ、邪魔者共が!! エースキラー!!」

シユバリアンがそう声をあげると上空から金色の身体をしたロボット、「エースキラー」が現れる。

「なに!? エースキラーだと!?」

『ジユエルシーードも大切だけど、今は旅館の人達の方が大切だ、早くみんなを避難させに行こう！』

なのはとフロイト、アルフとコーノミラーナイト、Wとオーズも争っている場合では無い為に、一時協力してみんなを非難させようとする。

タイムレッドとシグナルマンはシュバリアンと戦うことに専念。

「俺が時間稼ぐ！！ 行くぜ、ファイヤアアアアアー！！！」

炎斬の身体に炎が纏わり、彼は赤い巨人、炎の戦士「グレンファイヤー」へと変身した。

ウルトラマン以外の巨大な戦士は「仮面ライダー」しかいなかつた為にタイムレッドもシグナルマンも驚きを隠せなかつたが、今はそれ所では無い。

と言つてもJは基本的に等身大だが。

「ファイヤーラリアット！！」

炎を纏わせた左腕でラリアットをエースキラーに炸裂し、エースキラーは吹き飛ぶ。

「行くぜえ！！」

グレンファイヤーは起き上がりつたエースキラーにそのまま飛び蹴りを喰らわせようとするがエースキラーに足を掴まれ受け止められてしまい、そのまま地面に勢いよく叩きつける。

「のわあああ！？」「

エースキラーから逃れるグレンファイヤー。

「いつてーなこの野郎！！」

エースキラーは右手をクイクイと手招きしてグレンファイヤーを挑発。

「ハハハ……あんまり舐めてんじゃねえぞ！？」

とグレンファイヤーがエースキラーに殴りかかったが、エースキラーはしゃがんでグレンファイヤーの拳を避け、グレンファイヤーの腹部を殴りつける。

「あらあ！？」

さらに腕を十字に組みあわせ、光線、「スペシウム光線」をグレンファイヤーに発射する。

「ぬお！？ ファイヤースティック！？」

炎のステイック、「ファイヤースティック」を両腕で廻して回転させ、エースキラーの光線を防ぐが、スペシウム光線は初代ウルトラマンと同じ必殺技、その為威力が高くグレンファイヤーは吹き飛ばされてしまう。

「うわああ！？」「

エースキラーが一気にトドメを刺そうとグレンファイマーに向かい走ってくるが、グレンファイマーはジャンプしてエースキラーの背後に回り込み、エースキラーの腰に手を廻して転ばせ、逆さに持ち上げる。

「さてと、あんまりグレン様舐めるなよ？ こいつは効くぜ？ 皆さんお待ちかねの……グレンドライバー！……」

そのまま地面へとパイルドライバーの如く叩きつけ、グレンファイヤーはエースキラーから離れ、エースキラーは立ち上がるが火花を散らして爆発した。

「ひやっほ～いッ！！ 相手が悪かったな！！」

サムズダウンをした後、炎斬の姿にグレンファイマーは戻った。

しかし、まだ戦いは続いている。

エースキラーがいなくなつた為、なのはとフェイトの戦いも……。

第6話『温泉激闘』（後書き）

戦闘か次回に持ち越しです。

次回の戦闘はタイムレッドとシグナルマン、なのはとフロイトが中心
……？

なのはの特訓は次回回想で。

因みにこはもう見ました。

第7話『三・人・転・校』（前書き）

やつぱり無印編でダイナとフォーゼ出します。
と言つても、本格的なのはA、Sになると思いますが、多分。

第7話『三・人・転・校』

「ディフェンダーソードでシユバリアンに斬りかかるタイムレッドだが、シユバリアンは腕の銃でタイムレッドに発砲し、タイムレッドを近づけさせない。」

「くつ！」

シグナルマンはシグナイザーをポリスバトンという警棒型の武器に変形させ、シユバリアンに向かつて行く。

タイムレッドと同時にディフェンダーソードとシグナイザーをシユバリアンに振りかざすがシユバリアンは鎌のある右腕でガードし、2人を押し返して鎌にある銃口から銃弾をタイムレッドとシグナルマンに発砲。

「「ぐわああ！？」「

しかし、タイムレッドはディフェンダーソードをディフェンダーガンに組み換え、シグナルマンはシグナイザーを再びガンモードへ。

「「スーパー戦隊ダブルショート！」「

2人同時にシユバリアンを撃ち、直撃を受けるシユバリアン。

「おのれ！」「

再びディフェンダーソードとポリスバトンモードに組みかえる2人。

シユバリアンはシグナルマンを撃つがシグナルマンは全く動じずシグナイザーをシユバリアンに叩きつける。

「ぐうああ！？

「流石シグナルマンさん！！」

卷之三

シグナルマンに続き、タイムレッドがディフェンダー・ソードの刃を青く輝かせるファイナルモードにしてシユバリアンに向かつて走つて行き、シユバリアンはタイムレッドを迎へ討とうシユバリアンもタイムレッドに走つて行き、シユバリアンは鎌の様な腕を振るい、タイムレッドを攻撃しようとするもタイムレッドはディフェンダー・ソードでシユバリアンの腕を弾き、ディフェンダー・ソードでX字に切裂く。

「DVSソフウェイザー！」

さらにシグナルマンがショバリアンに接近してシグナイザーでショバリアンを切裂く。

「シグナルスラッシュュ！！」

た。 2人の必殺技が決まり、シエバリアンは火花を散らしながら爆発し

「ぐわああああ……?!」「やりましたね」「うむ。」

シグナルマンとタイムレッドはがつひとつ握手し、場所は先程のはとフロイトが戦っていた場所ではなくのはとフロイトが対峙している。

「結界を発動させたから、続きが出来る」

フロイトは静かにならぬふくらめる。

「どうしても……戦わなくてやけないの?」

なのははまだ話し合ひをしようとしていた。

「わざも言つたよね、言葉だけじゃ、なにも伝わらない。わざと私達は戦い合ひ」とでしか分かり合えない

フロイトは素早く動き、バルディッシュをなのはに振り降ろす。

なのはは、鏡太とランに教えられたことを思い出した。

『いいか? まづ気配を察知したりする練習だ!』

ところ訳でなのはに田隠しをして100円ショップの玩具で買った刃の部分が柔らかい刀でなのはが周りが見えない状態で受け止めることが出来れば解決。

『よつー!』

『ふにゃー?』

当然かの如く頭を叩かれるなのは。

鏡太に至つては……。

『「そうですねえ、心を落ち着かせることでどうか？ 心を落ちつかせれば見えないものも見えるかもしませんからねえ』

と言われ何故か数時間正座させられるのはだつたが、恭也や美由紀の剣道の練習を見る時は正座をしてるので基本的にこれはすぐクリア出来た。

（うん、幾ら早くても、気配で追いつけば！…）

なのははレイジングハートでバルディッシュを受け止め、フェイトを押し返す。

フェイトの背後にはなのはの桃色の魔力弾「アクセルシユーター」があり、それがフェイト目掛けて飛んでくる。

（なっ！？）

フェイトはジャンプして避け、アクセルシユーターを回避。

「やつぱりアクセルシユーターの扱いはまだ難しいなあ
(この子、前より強くなってる……?)

ランと鏡太の協力があつた為か、ユーノの教えもありなのはは原作よりも早く成長している。

以前はフェイトにボロ負けだつたのにも関わらず、今回は互角に戦っている。

なのはのアクセルシユーターはまだ健在、その為フェイト目掛けて迫つてくるがバルディッシュで斬り伏せる。

(「この子のこと、甘く見ていたかもしれない……でも、それでもまだ私の方が……強い……」)

ビュンツーと一瞬強い風が吹いたと思うと気配を感じ取れないほどのスピードを出したフェイトがバルディッシュをなのはの首元に突きつけており、するとレイジングハートがジュエルシード一つを取り出してフェイトに差し出した。

「レイジングハート、なにを！？」

「きっと主人思いの良い子なんだよ」

そこに丁度ラン、鏡太、ユーノ、ライトと光とアルフ、炎斬、ナオキがやってくる。

「負けてしまったようですね、なのは……」

「ああ」

炎斬は光を見てフェイトとの関係を聞く。

「ええっと、ごめん！ その話は後で！ 僕はフェイトさんにちょっとついて行かないといけないから！」

「はあ！？ お、おい待てよ光！？」

光はフェイトとアルフの元に行き、なのはが去りうとしたフェイト達に「待って！」と声をかける。

「あ、あの、私高町なのはって言つんだ。あなたの名前は？」

「…… フェイト・テスター・ロッサ」

「フェイトちやあつ」

フェイトはなのはがフェイトの名前を呼び切る前に高くジャンプしてアルフと共に去っていき、光はオーブタジヤドルコンボに変身してフェイトの後を追いかけた。

「言い訳を考えなければな、炎斬……」
「だなあ」

まあ、ナオキと炎斬と光、鏡太、竜也の部屋の1つはこの3人で使っているのでなんとか誤魔化すことは土郎達には誤魔化せたが、竜也には正直に話す。

「そりゃ、そんなことがあつたんだ」「すいません、今まで黙っていて」

鏡太が申し訳無さそうに頭を下げるが、竜也は首を横に降る。

「いや、正直に話してくれて嬉しこよ。だけど、俺の力が必要な時があつたらいつでも言つてくれ。俺は鏡太とランの保護者なんだからな！」

胸を張つて竜也が言い、ランと鏡太も頷いた。

(しかし、竜也さんに迷惑をかけるのは……)

竜也にはあまり迷惑をかけたく無い鏡太、それはランも同じだった。

*

セントフローレスのマンションに行つた光は……。

「冷凍食品ばかりじゃ、わやんとした栄養取れないよ……」

フロイトが「お腹空いたな……」と歯を、持ってきたのが冷凍食品だつた為光は冷蔵庫を見ると冷蔵庫の中には冷凍食品しかなかつたのだ。

「わやんヒタジャドルになつて家に一気に帰つてわやんとしたものじうなこと……」

その時、ソリになつてゴンボになつた時の後遺症が現れ、光は倒れこみやうになつたがフロイトによつて扶えられる。

「ちょっと大丈夫かい……？」

アルフが光を心配やうに呟く。

光は「すうすう」と眠つておつ、フロイトは光の顔を覗き込んで少し顔を赤くした。

(あつ、なんだか可愛いかも、寝顔／＼)

数分後、光は目を覚まして寝かされていたベッドから飛び起きる。

「あつ、
目が覚めた？」

隣にはアルフが座つており、光はキョトンととしている。

「アンタ、オーズに変身して気を失つたんだよ」

「あつ、そつか……。あれ？」

アルフが「フェイトのだよ?」と首を傾げながら答えると光はみる
見る顔を赤くしていく。

慌ててベッドから降りる光をアルフは不思議そうに見ていた。

「そうだ、シャワーとか借りていいですか？」汗かいちゃつて

アルフは頷いて承知し、風呂場まで案内。

その後、風呂場から去つていき、元の部屋に戻つた後「あつ！」と声をあげてなにかを思い出した。

(今、フェイトが使って無かつたけ……？)まあ、いつか

良く無い良くない。

そして風呂場では……。

「『アレ?』」

入浴中のフュイトと遭遇してしまった光がいた。

「「ツ……！」／＼／＼／」

光は急いで戸を開じて息を整える。

（わう言えばフュイトさんどこに行つたか聞いて無かつた！／＼／＼／）

兎に角光はフュイトに謝罪。

「う、ごめんなさい！！ その、アルフさんに汗かいだからシャワー借りていいかなって聞いたらいって言われてその……／＼／＼／う、ううん、その、えつと……私は、平氣だから……／＼／＼／アルフ、忘れてたのかな？」

その後、色々あつたが最後はフュイトに料理の作り方などを教えてアルフの背中に乗り、旅館にこっそり帰つて行く光だった。

*

翌日の朝、なぜかランだけなのは、アリサ、すずかと同じ部屋で寝なければならないというなんとも羨ましい状況になつていた。

ユーノも一緒にランにとつてはそれが救いだつたりするが。

そして朝、ランが目を覚ますと寝ぼけたせいか、なのはが自分の布団の中に入り込んでいた。

— ツ ! / / / /

しかも少しほのめの着てある着物がはだけて右の肩が見えており、さらにランの顔を真っ赤にさせた。

「/ / / / お、おい、なのせ…… / / /」

ランはなのはを優しく起こすとなのはほ今の自分の状況に気付き、ラン動搖顔を耳まで赤くさせた。

旅館になのはの叫ひか響ひびきしたどし

*

その後、士郎達がいるので戻つて來ていた光からは何も聞けないまま帰つて行つた。

炎斬とナオキにも光がなぜフェイトに協力するのかその理由を聞い

てくるように言い、家に帰つて光に炎斬とナオキは協力する理由を聞いたが。

「『めん、僕の口からじや言えない。 僕が言つちやダメなことだから』

と謝られ、炎斬とナオキはそれ以上なにも聞かなかつた。

その後、光はなのは達と同じ学校に通つてゐる為、学校へと向かいなのはと遭遇したが……。

「光くんにはなにも聞かない。 フェイトちゃん本人の言葉からどうしてジュエルシードを集めのか聞きたいから」

なのはが笑いながら光に言つ、しかし光はなのはがどこか悲しそうな顔をしてるよう見えた。

光となのは、アリサ、すずかは同じクラス、HRで担任の教師から転校生がくると聞き、転校生3人が入つてくる。

「モロボシ・ランだ。 分からねえことばっかりかもしだねえが、よろしく頼む」

「騎士鏡太と申します。 以後よろしくお願ひします」

ランと鏡太が転校してきたのだ。

(ランくん！？ 鏡太くん！？)

これにはなのは、すずか、アリサ、光が驚き、光に至つては目が泳いでいた。

そして最後の1人が胸をバンバンと叩き、人差し指をどこかに向かつて向ける。

「俺は如月シン！！ 夢はこの学校の生徒全員友達になる男だ！！！
もちろん、お前等とも友達になるからな！！」

ランと鏡太を指差すシン。

「は、はあ……」

「ハハ……へンなのキター！」

鏡太は戸惑いながらも頷き、ランはシンは変な奴だと思つてゐる。

「ランにシン……、案外似た者同士なんじゃないかい？」

ライトの一言が聞こえたランは「はあ…？」 つと声をあげる。

「ダチのピンチは見過せねえ、困つたことがあつたらなんでも言えよー！」

ニカツと笑いながらランに言い放つシン。

ランは一瞬シンを睨みつける。

「お前えー！」

（えつ？ なんで怒つてるの？）

と一瞬なのはが思つたが……。

「いい奴だなあ」

ランのその口調でなのはがずつ二けた。

ういつす！
ういつす！
ういつす！
ういつす！
ういつす！

などとランとシンがやっているとアリサが「もういいからー！」
と声をあげて2人のやり取りを止めた。

「えつ?
なんだつたの?
今…？」

ここにあかの森也。

第7話『三・人・転・校』（後書き）

シンがはやてとのカップリングだと思った人、ハズレです。

第8話　『この怒り／夜の街の戦い』（前書き）

何気にあのギャグ漫画のキャラが……。

第8話『この怒り／夜の街の戦い』

学校、休憩時間にアリサが突然なのはの机をバンッ！と叩いた。

「いい加減にしなさいよーー！」

すずかとアリサの話を聞かず、ポケーッとしているなのはに、アリサは腹が立つたのだ。

「「」、「」めんねアリサちゃん……」

なのははアリサに謝るが「もうこいわよー」と怒鳴られてアリサは教室を出て行き、すずかはそれを追いかける。

「なんだ、喧嘩したのか友達と？」

シンに尋ねられ、なのはは「クッ」と頷く。

「だったら今すぐ仲直りしに行けよー悪いと思つてんだろ？原因がなんなか知らねえけど……」

そこでランがシンの肩を口にしてシンを止めるラン。

「それはお節介つてやつだぞ、自分達のことば、自分達で解決した方が1番いい時だつてあるしな」

シンは「だけどー」と言ひながら、ランが説得を続けてそれだけでよつやくシンは諦め、ランはなのはの隣に来る。

「フヒイトの」と、考へてんだろ?」

「……うん」

「お前はあいつとどうしたい? お前はあいつとぶつかり合って、どうしたいんだ? アリサと仲直りするのも大事だがよ、フヒイトとどうしたいかを見つけないと、ダメなんじやないか?」

なのはは黙つたまま、椅子に座つてゐままだつた。

「お前は良いい奴だからさ、きつと分かつてくれるわ。アリサの奴も」

「有難う、リソンくさ」

「おっ」

ランがサムズアップして笑顔を向けるとなのははみるみると顔を赤くして行つた。

その後、ランは光をとつ捕まえて正座させ、フヒイトとの関係を聞きただしていた。

「とこう説で、せつせと咲こあつた方が楽だぞ?」

なぜかランはサングラスをしており、どこからかカツ丼を出していた。

「えつ? なにこの刑事ドラマ風?」

近くにはなのと鏡太、ライトもいる。

「アハハ……実は刑事ドラマでランが少しハマつたみたいでして……」

…

「うわー、美味しそうーーー！」

光に至つてはそのカツ丼を美味しそうに食べていた。

「美味そりに食つてんじゃねえぞーーー！俺だつて食いたかつたのに

……」

「「食べたかつたのーー？」」

「訳が分からぬいよ、ランがやつてることば

なのはと鏡太のツツコミが炸裂し、ライトはどこかで聞いたことが
ある台詞を喋る、なのはがフェイトに直接事情を聞くから光に聞く
のはやめてくれとランに頼み、光は解放された。

*

その頃、光の家では……。

「おい、炎斬！！！ それ俺のアイスだろ！！！」

「知るかあーー！ 僕だつてアイスくらい食いたいんだよーーー！」

アンクと炎斬がアイスで取り合っていた。

「アイスくらいで取り合つたな……」

ナオキが止めに入ろうとしたが……。

「「黙つてろ焼き鳥！！」」

「なつ、無礼者！！ 2人揃つて私を焼き鳥呼ばわりとは…！ 特にアンク、お前だけには言われたくない…！」

とこの3人が喧嘩をし始めていたとか。

光に至つては帰りにフェイトのマンションへと寄り道をしてフェイトと一緒に買い出しだある。

「それで、フェイトさんはなに食べたい？」

光が微笑みかけながらフェイトに尋ね、フェイトは首を傾げ考える。

「うーん」

「ハンバーグとかにしようか？」

「うん…！」

光の言葉にフェイトが頷き、スーパーで材料を集め始める。

さらに言えば、なのはとランもお使いという形でこのスーパーに来ており、買い物をしていた。

「ランくんもお使い？」

「ああ、まあな。 竜也に頼まれて…」

それから2人は成り行きで一緒にスーパーを廻り、偶然にも光とフェイトには接觸しなかつたが、「とこりてんコーナー」を通りかかった時……。

なにか人型のとこりてんが「10円」と書かれてとこりてんコーナ

ーに座つてこちらを見ていた。

Г Г

「お姫さん、今夜どうしてん？」

(（喋った！！？）

謎のところに話しかけられ、固まらうとなのは。

「俺さあ、今だつたら10円だからお得よ?」

「ハルのエリザベスを無視して立ち去るにすむか……」

といひてんが猛スピードで追いかけてきた為なのはが悲鳴を上げ、ランに抱きつめ、迫ってきたといひてんをランが思いつき顔面から殴つた。

そのところてんは一撃ノックダウンされたが、なのはは怯えた表情でランに抱きついたまま。

「あ、あのセ、もうあの変なのふつ飛ばしたから.....／＼／＼
「ふえ？ あつ／＼／＼／＼」

なのはは今の状況に気付き、ランから離れる。

「あ、有難う／＼／＼／＼

顔を赤くしながら、なのははランに言つた。

*

光とフェイトがマンションに帰つてきた時には夕方だつたのだが。

「よつやくビリ行つてんのか尻尾掴めたぜ！－！」

炎斬、ナオキ、アンクが2人の後ろにいた。

「一体どこまつ歩いてんのかと思えば、まさかこんな所に来てた
とはなあ」

「うえり……、なんでいるの…？」

どうやら炎斬、ナオキ、アンクは光達の後をつけていたらしい。

「すまない、だがやはり気になつてしまつてな。光、君には色々
と世話になつてている。だから恩返しとしてなにか手伝いたいんだ
「まつ、俺も借り作つたまんまじやな」

上からナオキと炎斬が喋り、フェイトは警戒しているが、光が説明
して警戒を解いて貰う。

「光の、知り合いなんだ」
「うん、みんないい人だから。アンクのことならフェイトさんも
知つてるでしょ？」

そしてアルフを呼んでフェイトとアルフに炎斬、ナオキ、アンクもジュエルシード集めに手伝つて貰つてもいいか尋ねた所、OKを貰つた。

「光の知り合いなら大丈夫そうだしね」

とアルフ。

「まつ、俺にとっちゃグリードが出てくる可能性があるから向き合うだけだけどな」

「素直じゃねえなアン」「ちやんよおー。」

炎斬がからかうようにアンクに言い、「アンクは『アン』じやねえ！」と反論。

(つたく、伊達見たいなこと言いやがつて)

*

その夜、フェイトがジュエルシードを強制発動させ、それに気付いたのはとユーノがランと鏡太、ライトに連絡してユーノが結界を張り、なのは、ユーノ、ラン、鏡太、ライトはジュエルシードのあ

る場所を田指す。

(まさか、こんな街中で……)

そして同時にジュエルシードの近くに出くわすフュイト、光、アンク、炎斬、ナオキとのは、ユーノ、ラン、鏡太、ライト。

「炎斬にナオキ!? お前等なんで……!?

「悪いな、ラン、鏡太、光に借りを返したいんでこいつにつけたわ

炎斬が説明し、なのはとフュイトは既にバリアジャケットを纏っている。

なのはとフュイトは2人同時にジュエルシードを封印し、なのははフュイトに向け、自己紹介した。

「！」の間は自己紹介出来なかつたけど、私、高町なのは

だがそんななのはにお構いなしにフュイトはなのはに攻撃を加えるが、なのはは飛行して避ける。

「ツ！」

そしてなのはとフュイトは空中で激しく戦い合い、アルフとユーノも戦い始める。

「話し合いだけじゃ、なにも解決しないって言つたけど、それこそなにも解決しないよ！！」

なのはがフュイトにそう訴える。

「俺等はまだいる？ やり合つか？ そういうや、いつぞやの決着をあのバカ参謀に邪魔されたんだつたけな。決着つけよ! ザ、ラン！」

炎斬がランに指を差して言い放つ。

「そういうやうだな、お前等、邪魔すんじゃねえぞ」
「しうが無いね、それじゃ、僕達は邪魔が入らない様に見学と行こうか？」

ライトの提案に光達は頷く、あんまり多く暴れ過ぎると周りに被害が及ぶからだろ?。

ランはウルトラゼロアイを出し、皿に装着。

「デュウツッ！」「
「ファイヤアアアアア！」

ランは等身大のウルトラマンゼロ、炎斬は等身大のグレンファイヤーへと变身し、グレンファイヤーは最速ゼロを思いつきり殴りつけむ。

「ぐわあ！？ 先制攻撃とはやつてくれるじやねえか！？」

ゼロはグレンファイヤーにお返しとばかりに素早く動いてグレンファイアーの顎にアッパーを喰らわせる。

「ぬわああ！？ お前にそやつてくれるじやねえのゼロちやんよ
！ ファイヤースティック！」

炎のステイック型の武器「ファイヤースティック」を出すグレンファイヤー、対するゼロはウルティメイトブレスレットから槍型の武器「ウルトラゼロランス」を出し、ファイヤースティックとウルトラゼロランスがぶつかり合ひ。

なのははフェイトのバルティックシューでの攻撃を避け、回避し、まだなのははフェイトに訴えている。

「競い合つのは仕方ないけど、でも！だからって何も知らないで競い合つのは嫌だ！！私は最初はユーノくんの手伝いでジュエルシードを集めてた。だけど今は違う！自分の意思で集めてるの！ そうじやなきや、周りに迷惑がかかるから！！」

これが自分がジュエルシードを集めるとフェイトに話し、なのははフェイトがジュエルシードを集めている理由を尋ねる。

なのはの必死の呼びかけに、心動いたのかフェイトは口を開く。

「私は……」「言わなくていい……」「ツー」

フェイトが喋りとしたその時、アルフが口を挟む。

「周りに優しくされてばっかりの甘つたれたガキンちゃんかに何も話さなくていい！！」

その言葉に、ライトが眉を寄せた。

「甘つたれたガキンちょ？姉さんのこと何も知らない犬に言われたくない！！」

「犬じや無くて狼だよ！」

「どっちでもいい、なにも知らない癖に、姉さんにそんなことを言う奴は僕が許さない。コーン、選手交代だ」

コーンは「えつ？」となり首を傾げる。

「まさか、戦いつもりなのか！？ だってダブルになるには……」「心配無いさ、確かに僕は体力こそそんなに無いけどこれある」

ライトが腰に装着したのはメモリスロットが一つの「ロストドライバー」であり、サイクロンメモリを取り出す。

『サイクロン…』

「変身…！」

メモリスロットに差し込み、それを傾けるとダブルの両サイドをサイクロン一色にしたような「仮面ライダーサイクロン」へと変身した。

「僕は、仮面ライダーサイクロン」

サイクロンはゆっくりとアルフに近づき、アルフは身構える。

「姉さんは君に言つた訳じゃない、フュイトに言つたんだ。君に

答える権利は無い！」

「あたしとやる気かい？」

サイクロンはアルフに向かい走り出す。

一方、ゼロはグレンファイヤーを逆さまに持ち上げてパイルドライ

バーのように地面に叩きつける「ゼロドライバー」を炸裂。

お前また真似しやがったなああああああああ!!!!?」

倒れこんだグレンファイヤーはすぐに起き上がり、首をコキコキ鳴らす。

「あー、首イテ」

髪をかき上げる仕草をすると頭の炎が少し燃え、グレンファイヤーは再びゼロに向かい走り出す。

しかし、ゼロは真上に飛びあがり、グレンファイヤーはそこで立ち止まる。

「おおつ？」

かかと落としをしてくるゼロ、だがグレンファイヤーは両腕でゼロの足を掴む。

「なに？」

グレンファイヤーはゼロを振りまわして投げ飛ばす。

「おわああ！？」「

なんとか着地するゼロ、ゼロは腕を「L」字に組み、必殺光線である「

「ワイドゼロショット」をグレンファイヤーに放つ。

もちろん威力は抜いている。

「シュアアアア……」

グレンファイヤーは両腕を前に突き出して放つ炎、「ファイヤーブラスター」を発射し、ワイドゼロショットとぶつけ合わせ、2人の間に爆発が起きる。

「「ぐわあああ……!?」」

「「んなゴチャゴチャした戦いに、グリードとかが責めたら面倒だな」

アンクが言い、光は「まさか」と笑っていたが、2人の顔の前に水が通り過ぎる。

「「……」」

左を向けるとそこにはシャチの頭に見た目ですぐに女性の怪人だというのが分かる「水棲系グリード・メズール」と、頭はサイのようであからさまにパワーがありそうな「重量系グリード・ガメル」が現れる。

「メズール、ガメル! !

「久しぶりね~、アンク」

アンクが2体のグリードを睨みつけ、光は「あれもグリード?」とアンクに尋ねると「ああ」と答える。

「光、あいつ等からコア横取りしろ！…」

アンクはタカ、クジャク、コンドルのメダルを光に渡し、光はオーズドライバーを装着。

「分かつた、行くよアンク」

オーズドライバーにメダルを入れて行き、オースキャナーをとつて中央部をスキヤン。

「変身！！！」

『タカ！ クジャク！ コンドル！ タージャードル』

光は「仮面ライダー オーズタジヤードルコンボ」に変身し、アンクは怪人体になつてガメルとメズールに戦いを挑む。

「ミラーナイト、私達も彼等を援護しよう。これはジュエルシードとは関係無いからな」

「分かりました」

鏡太とナオキもオーズとアンクと共にガメルとメズールに戦いを挑んだ。

こうして、それぞれが戦いを始めるのだった。

第8話『この怒り／夜の街の戦い』（後書き）

書いてる途中、スーパーにへきつとあるといひてんがいたらなんか面白がりと悪こ出してみました。

感想などお願いします。

第9話 「宇・宙・流・星」（前書き）

挿入歌1「Giant Step」

挿入歌2「Shooting Star」

第9話『宇・宙・流・星』

アルフが魔力弾をサイクロンに放つが、サイクロンは右腕を振るい風を起こし、緑の風の壁を作つて魔力弾を弾く。

「んっ？ ビニに行つたんだ？」

何時の間にかアルフがいなくなつており、サイクロンは気配を真上に感じて上を見上げると空中から急降下して爪を振るうアルフの姿が見え、サイクロンはアルフの爪で斬りつけられる。

「ぐああ！－？」

「なんだい、口ほどにも無いねえ」

「それは、どうかな？」

次の瞬間、サイクロンは目とまらぬ速さでアルフの周りを高速で走り回り、アルフを翻弄。

「くっ、ちょこまかと－－！」

アルフは手当たり次第サイクロンを攻撃するが早すぎる為追いつかず、右横からサイクロンのキックを喰らい蹴り飛ばされる。

「ぬああ！－？」

オーズ、アンク、鏡太、ナオキはガメルとメズールに戦いを挑んでいた。

「俺、アンクとオーズ倒す－－！」

見た目は「完全体」呼ばれる形態だが、本来の力を發揮出来ていなければメズールとガメル、ガメルは強烈なパンチをアンクに喰らわせ、後退してしまう。

「ぐう！？ 相変わらずパワーバカか、ガメル

怪人体のアンクは背中に翼を広げて空中に飛行し、両手からガメルに炎を放つがガメルは両腕を交差して防ぎきる。

「チツ

「私に任せろ。 ジャンファイト！」

ナオキが「ジャンファイト」と叫んだ時、ナオキは本来の姿である等身大の「ジャンボット」となり、ガメルに接近し、ガメルとジャンボットは同時に互いを殴りつけ、どちらも吹き飛ばされた。

『ぬああ！？』

「うわああ！？』

等身大のミラーナイトになつた鏡太とオーズタジャードルコンボの二人は共闘してメズールと戦つている。

「怪人といえどレディに攻撃するのは凌ぎないですね～」

頭に手を置き、「うーん」と唸るミラーナイト。

「なんこと言つてる場合か！？』

そうアンクに怒鳴られ、仕方なくメズールと戦うこと。

「あら？ 結構紳士的ね、あなた」
「お褒めに預かり光栄です。ですがジュエルシードを狙つてるならあなた方には譲る訳にはいきません」

オーズは剣型の武器「メダジャリバー」を使い、メズールに斬りかかるがメズールは水流を左手からオーズに放ち、オーズを吹き飛ばす。

「うわああーーー？」
「はっーー！」

両手から銀色のナイフ、「ミラーナイフ」をメズールに連射するミラーナイトだが、メズールは跳びあがって避け、身体を液体化させてミラーナイトを攻撃。

「ぐわあーー？」
「はああーー！」

一方、ゼロとグレンは……。

「はあ、はあ」
「ぜえ、ぜえ」

体力の殆どを使い果たしたのかランと炎斬の姿に戻りぐつたりしていた。

『まあ、仕方が無いか。 あれだけ暴れれば』

なのはとフロイトは空中戦を未だに繰り広げていた。

「やあああーー！」

「はあああーー！」

レイジングハートとバルティッシュがジュエルシードのすぐ真上でぶつかり合い、その時強烈な衝撃波が起じた。

それには流石にグリードである3人も少し吹き飛ばされ、オーズ達もまた吹き飛ばされた。

「ぬおうー？ なんじゅーじゅーーー？」

炎斬とランもまた吹き飛ばされてしまい、ジュエルシードは宙に浮かんだままの状態で放つておけば暴走の危険性がある。

「フェイトさん？ なにを……？」

オーズは少し破損したバルティッシュをしまい、フェイトはジュエルシードに素早く接近し、それを両手で包みこむ。

ジュエルシードの力によりフェイトの手が切れて血が出たりしているのをオーズは見て急いでフェイトを止めに向かう。

「あら？ あなたの相手は私の筈だけど？」

「邪魔だ！！」

メズールが阻んだがオーズはそのまま突っ込み、メズールはオーズに殴りかかったがしゃがみこんだオーズはメズールの腹部に左手に装備された盾のような「タジャスピナー」を押しつけ、そこから炎を放つ。

炎により吹き飛ばされたメズールの身体から2枚のコアメダルが飛び出てアンクがそれに気付き、右手だけの状態で飛行してメズールのコアメダルを掴み取るアンク。

手に入れた「コア」は「タコ・コア」2枚と「ウナギ・コア」1枚。

「こいつは設けたな」

メズールが大好きなガメルは急いでメズールの元に駆け寄ろうとするが。

『どこを見ている！ ジャンナックル！』

ジャンボットの左手がロケットのように飛び、そのままガメルを殴り飛ばした。

「うわあああ～！～！？」

ガメルはそのままメズールの元まで転がりながら倒れこむ。

「フライヤーなん！」

「無茶だ。素手でシコハルシードを止めるなんて！」

なのはとユーノがなんとかしてフェイトを止めようとしたいのだが

▪ ▪ ▪ ▪ ▪

「ぐう、お願い……止まって……。止まれ……！」

両手が傷付きながらも必死にジュエルシードを止めようとするフロイト。

(母さんの為に……お願い！…)

だが、ジュエルシードからフェイトを無理やり退き離す人物がいた。

「無茶し過ぎだ」

それはオーズであり、オーズはフェイトとジュエルシードを無理やり引き離したのだ。

「離して！！ 私はジュエルシードが…！」

「分かってる、だけど、此処は僕に任せて」

オーズはタジャスピナーの中にオーズドライバーにあるタカ、クジヤク、コンドルのメダルを入れるとオースキヤナーでタジャスピナーに押し当ててスキヤン。

『タカ！ クジヤク！ コンドル！ ギンギンギンギガスキヤン！』

オーズの背中に赤い翼「クジヤクウイング」が展開してオーズは飛行し、オーズの身体を赤い炎が纏わり、不死鳥のような形に炎はなつて突っ込むタジャドルコンボの必殺技「マグナブレイズ」をジュエルシードに繰り出し、爆発が起きてジュエルシードは封印され、爆発の炎の中からオーズが飛びだし着地。

「封印……出来たの？」

「オーブは俺達グリードを封印する力があつたからなあ。」

ジュエ

なのはの疑問にアンクが答え、「えつ？ 誰？」 つと人間態に戻つたアンクに怯えつつ離れて行く。

「おい、なんで逃げんだ！？」

「ひえ！」

「ひえ！」

涙目なのはにランが駆け寄る。

「もう大丈夫だ、なのは」

「ら、ランくん……」

ランが来て安心の表情を見せるなのは。

「なんで怖がつてんだ？」

「そりやオメー、どう見てもこえー不良だもんない？」

と馴れ馴れしく自分の肘をアンクの肩に乗せる炎斬。

「お前に言われたくないんだよ金髪野郎！..」

「お前だつて金髪だろうが！..」

そこで仲裁に入るジャンボット。

『喧嘩をするな！ まだグリードがいる。 戦いは終わっていない』

『か～つ！ 相変わらず頭硬いねえ～？ 焼き鳥』

『焼き鳥では無い！ 無礼者！..』

炎斬に対して怒るジャンボット。

メズールとガメルは立ち上がり、引き上げの準備を始める。

「一回引き上げましょう?」

「わ、分かった~」

ガメルの額にメダルを一枚入れられるような穴が出現し、その中にガメルが自身のセルメダルを2枚、メズールが1枚入れるとガメルの身体からエイとサイを合わせた「エイサイヤミー」とバイソンのような「バイソンヤミー」が生まれた。

「うおおおおお!~!~!

バイソンヤミーは重力を操り地面をえぐらせて巨大な岩を炎斬、ジャンボット、アンク、ラン、なのは、コーノに向かい投げつける。

『うわああああああ!~!~!~!』

『サイクロン! マキシマムドライブ!』

そこにサイクロンモリを右腰の「マキシマムスロット」に差し込み、横を叩いて必殺技を発動させたサイクロン。

サイクロンは右拳に緑色の風を纏わせ、岩に向かって突き出す。

「サイクロンストームパンチ。 やあああああ!~!~!~!

すると突風が巻き起こり、風が岩を碎いたのだ。

「ライト!! ナイスだよ!~!~!』

「流石なのはの弟……」

ユーノとランがサイクロンにサムズアップを向ける。

だがその隙にメズールとガメルは既に逃亡しており、エイサイヤミーとバイソンヤミーだけとなつた。

「ううう」

オーズはコンボの副作用が遂に出た為、強制的に変身が解除されてしまう。

「あつ」

フェイトは光に駆け寄り、心配の表情を見せるが「大丈夫」と微笑み、フェイトを安心させる。

「オーズは変身不能、ランと炎斬、アンクも疲れている。ミラー・ナイトもそれなりに疲れてるだろうし、なのはとフェイトも同様となると……。ジャンボット、君はまだ平氣かい？」

『ああ、私はまだやれる！』

一步前に出るジャンボット、しかしその時、「青い流星」のようないが2体のヤミーにぶつかり、さらに吹き飛ばされた2体のヤミーに空中から右手にオレンジのロケットを装備した白い宇宙飛行士のようなライダーが2体を殴りつけ、地上へと殴り飛ばした。

「ぐわあああ！？」

エイサイヤミーが先に立ち上がり、「何者！？」と叫ぶと、青い流

星の中から黒く、流星のような青い顔をした「仮面ライダーメテオ」と口ケットが消えて地上に降り立つた白い「仮面ライダーフォーゼ・ベースステイツ」が姿を現した。

「2人の仮面ライダー」

一 宇宙……ヰタ――――――――――――――――――

両手を広げて叫ぶフォーゼ。

「仮面ライダーフォーゼ!! タイマンはらして貰うぜ!! サイ

卷之二

フォーゼはバイソンヤミーを捕獲して使命。

「俺はバイソンだ！！ サイはこっちー！！
「どっちでもいい！ 行くぜー！」

フォーゼは背中のブースターで一気にバイソンヤミーに近づき、バインヤミーを蹴りあげる。

「お前が何を隠しているのか、さあやれ！」

エイサイヤミーは腕を鳴らしてメテオに攻撃を仕掛けるが避けられて廻し蹴りを食らわせれる。

「ほあひやーーー！」

エイサイヤミーの身体から無数の小型の「エイヤミー」が飛んで来

たが、メテオは動じずに右腕に装着された「メテオガンレット」に腰にあるドライバーの「メテオドライバー」に差し込まれた「メテオスイッチ」を抜き取り、メテオガンレットの左側部ソケットに差し込む。

「一気に決めてやろ!」

『リミットブレイク!　OK?』

「ほお〜!　わちゅわちゅわちゅわちゅ〜!〜!〜!

「スター・ライト・シャワー」と呼ばれる高速連続パンチの必殺技をエイヤミー達に次々に喰らわせていく、どんどん撃退されて行く。

「なに!?!?

「わちゅあ!?!?

飛び上がったメテオはエイサイヤ!!』急速接近して蹴りを喰らわせる。

「ほお〜!〜!

両手を広げてファイティングポーズを構えるメテオ。

バイソン・ヤミーは重力を操つてフォーゼの動きの自由を奪おうとするが、フォーゼはそれより早く腰に装着されたベルト、「フォーゼドライバー」の4つ差し込まれているスイッチを1つ引き抜いて別のスイッチを差し込み、そのスイッチを押す。

『ホッピング・オン』

フォーゼの左足にピンク色のホッピングのような「ホッピングモジ

「モジユール」が装備されてホッピングモジユールのスプリングでぴょんぴょん跳ねて空中からバイソンヤミーを踏みつける。

「ぬわああーーー？」

「続いてこいつだーーー！」

ホッピングスイッチを消し、2つスイッチをドライバーから入れ替える。

『チエーンソー・ガトリング・チエーンアレイ・オン』

右足には青いチエーンソーの「チエーンソー・モジユール」、右腕にはチエーンアレイが先についた「チエーンアレイ・モジユール」、左足にガトリングがついた「ガトリング・モジユール」が装備された。

「行くぜーーー！」

フォーゼドライバーの右側についたレバーを一度退く。

『ガトリング・チエーンソー・チエーンアレイ・ロミットブレイク』

まずチエーンアレイでバイソンヤミーを重力を使われる前に下から上に殴り飛ばし、ガトリングで空中に殴り飛ばされたバイソンヤミーをガトリング・モジユールで撃ちまくる。

「ぬわあああーーー？」

そしてバイソンヤミーが地上に落下する直前にフォーゼが素早く走り、バイソンヤミーが落ちてくる瞬間を狙つてチエーンソー・モジ

ユールでバイソンヤミーを切裂く。

「ライダー凶悪アターック！……」

『ネーミングセンス無つ！？ でも確かに凶悪！！？』

殆どの者達からそうツッコまれるフォーゼだが、そのまま必殺技が決まり、バイソンヤミーは爆発してメダルが散らばった。

「ぐわああああああ……？」

「お前ももう終わりだ」

再びメテオガンレットにメテオスイッチを差し込むメテオ。

『コモリットブレイク！ O.K.?』

高く飛びあがり、空中から急降下キックを繰り出す必殺技「メテオストライク」がエイサイヤミーに決まり、エイサイヤミーは直撃を受けて爆発し、メダルが散らばった。

フォーゼはラン達に振り返る。

「いや、俺も思つたよ。 やつてる途中からこれ結構工ゲツねえつて。 まあ、それは置いておいてだ！！ 俺は仮面ライダーフォーゼ！！ 全てのライダーと友達になる男だ！！（んっ？ どつかで聞いたような台詞だな……？）

この時、ランはなんとなくフォーゼの正体に気が付いた。

「ほり、行くぞ」

「えつ？ あつ、ちよつと！？」

そのままフォーゼとメテオは何処かに去つて行つてしまい、一同は
ただ苦笑いするだけだった。

第9話『宇・宙・流・星』（後書き）

いや、書いてる途中で自分も思いましたよ、チーンアレイとチーンソーとガトリングのリミットブレイクは……。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9302y/>

魔法少女リリカルなのはMEGAMAX SAGA

2012年1月8日19時50分発行